常識人は衰退しました

makky

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界には摩訶不思議な事象が溢れている

オカルトや超常現象、ＵＭＡや心霊現象等々

どれ一つを取っても、未だに証明されていない未知の分野である

そうーーポケットのなかに入ってしまいそうな程小さな存在が、現人類の科学力を大きく上回っている事だってあるかもしれないのだ

これは小さな奇跡に廻り合い　その運命を大きく変えてしまった少女と

お菓子が大好きな奇跡の存在達との　普通ではない日常の物語

目次

第1章：新しい非日常との出会い

だいいちわです？ ―― 1

だいにわです ―― 9

だいさんわらしいです ―― 17

だいよんわだったらしいです ―― 30

第2章：にんげんさんの大仕事

だいごわですよ ―― 40

だいろくわですから ―― 48

だいななわならいいですな ―― 56

だいはちわちっくに ―― 66

だいきゅうわのごようす ―― 87

だいじゅうわでしたか？ ―― 96

だいじゅういちわにより ―― 106

第1章：新しい非日常との出会い

だいいちわです？

この町は私の故郷だ
幼い頃、それこそ物覚えついたときから、私はこの町で生活してきた
そして同時に、私はこの町が嫌いだった
右を向いても左を向いても、目に飛び込んでくるのは奇想天外な事ばかり
ある日は路面電車を追い抜いていく上級学年生を見て
またある日は自身の十倍を越す樹のてっぺんにある風船をジャンプで取るスーツのおじさんを見て
はたまたある日は一人を殴ったはずなのに周りにいる人間全員を吹き飛ばす道着姿の女性を見てと
はっきり言おう、この町はおかしい
おかしいことがおかしくないくらいにはおかしいのだ
このおかしな現象を「おかしい」と認識しているのは、どうやら私だけだったようだ
ようだ、というのは誰に話しても誰に聞いても返ってくるのは
「それが普通でしょ？」
という、私の常識を木っ端みじんにしてくれる言葉だけだったからだ
小学校三年生の出来事だったのは、今でも嫌と言うほどよく覚えている
きっとあのまま行けば、私は確実に歪んでいただろう
誰も私の言うことを「正しい」と感じてくれない
そんな状況が続けばきっと私のことだ、その違和感を心に押し止めて噛み殺してしまっただろう
そして何かしらの形で反動を受けて、それはそれは人前に出して恥ずかしい趣味に没頭したに違いない

私が言うのだ、絶対間違いない
だからこそ
本当はこんなことに言いたくはないのだが
言いたくはないのだがーー
ーーにんげんさんおなやみごとですか？
ーーぼくたちでよければそうだんにのりますよ？
「あー…大丈夫だ、明日のお菓子を何にするか考えていただけだ」
この不可思議を凝縮して無添加のまま作ったような彼等には
ーーおかしー！
ーーやったですー！
ーーいまからたのしみなのです
ーーはやくかえりましょう
ーーおかしのひはあしたです？
ーーたのしみはとっておくものです？
「分かった、分かったから増えないでくれ。慣れたとは言え結構大変なんだよ」
この小さな幸せをくれた彼等には
「ーーありがとうな」
私ーー長谷川千雨は小さくお礼を言っておこうと思う

さて、明日のおやつ作りの材料購入のためスーパーに来ているのだが、ひとつだけ守るべきことがある
タイムセールの時間に近づかない、だ
え？混雑時を避けるのは普通だろって？
そんな理由だったらわざわざ「守るべきこと」なんて前置きしないさ

一番問題なのは、その時間帯に遭遇したくない連中が集中するから
遭遇したくない連中、それは私のクラスメイトだ
この時間帯、だいたい四時過ぎごろは部活をしていない寮生活の面子が集中しやすい
そしてここの女子中等部は原則寮生活だ
遭遇率がひじょーに高い
そんななかでも一番出会いたくないのがーーー
「…あーもう、ついてねーな」
緑色の髪、人形のような白い肌
そして隠そうともしない頭の二つのアンテナ（のようなもの）
私のクラス、2―A不可思議クラスメイト上位の絡繰茶々丸である
（今日はよりによってあいつか、苦手なんだよな私…）
表情のないその顔は、どう見ても無機質そのもので
張り付けた感情すらない、まっさらな白画用紙を見ている気分になる
ーーいやもう勿体振るのはよそう
そう、あいつはロボットだ
正確に言うとガイノイドらしいがそんなことはどうでもいい、重要なことじゃない
自分のクラスメイトがロボット（生後４ヶ月）と知ったときのおどろきっぷりは、その次の日のおやつ作りで四品作ってしまうほどのものだった
そんな彼女も今では立派な中学生（生後２年）になりまして
私の精神力は無事に全快してーー
くれるとよかったんだがな…
彼女は確かに不可思議クラスメイトの上位には入る
入るのだがそれでも順位は低い
ロボット程度ではあのクラスの最上位にはなれないのだ
最上位と言うのはそう、彼女とよく一緒にいる年齢詐称の女子中学生だろう
…僅差で一位というところがミソなのだが

言い出すときりがないからこの辺で終わりにしよう、今は目の前の問題に取りかかるべきなのだから
絡繰茶々丸は先程も言った通り無感情のクラスメイトだ
うっかり顔を合わせたとしても「こんにちは」程度で終わらせてくれるくらいには私に無関心だ
問題はそっちじゃない
彼女がいると時折、本当に時折なのだが
先程話題に出した中学生にしては背が低い、金髪の海外留学生（担任談）がいることがあるのだ
その海外留学生は、学校の授業には殆どでない
出ても平気で居眠りをする
と言うか学校来て一番長くいる場所が屋上
周りとの会話は一切と言ってよいほどなく
「…ふん」とか平気で投げ返してくる
一体何のために留学しているんだと言われそうな、不良中学生なのだーー表向きは
正直に言おう、私はどうにかしてクラス替えをしてもらいたい
このまま中学卒業まで一緒だなんて悪夢以外の何者でもない
そうだ、彼女はただの海外留学生などではない
おとぎ話の中だけに生き、ただただ恐れられるだけの存在
人の血を啜り、眷属を生み出す
そう彼女はーー
「ほんと、ついてねーな…」
ーー目の前にいる彼女は、吸血鬼と呼ばれるものだ

後悔先に立たず、何て言うことわざがある
どれだけの後悔であっても必ず後に立つということ

つまり後悔は先には来ないのだ
そう今自分が置かれている状況もまた、後悔なのだから
（焦るな、ここで挙動不審な行動を取ったらそれこそ命取りだ…）
慌てて店を出る、視界から急いでそれる
そんなことをすればきっと一発で怪しまれるだろう
彼女相手にそこまでバカなことはできない
必要なものを急がず普段通りに取って店を出る、それで十分だ
ーーにんげんさんおこまりのごようすですが？
ーーぼくらがなんとかしましょうか？
だから頭の中に聞こえてくるこれは無視しなければいけないのだ
（…落ち着いて考えてみれば、あいつはこっちが何かしないと敵対しないんだったな）
考えすぎて思考が固くなってしまっていた
そうだ、彼女は敵対者には厳しいがそれ以外に害を与えることはしない
ーー無視してしまおう
相変わらずの事無かれ主義、なんとでも言うといいさ
そうと決まればさっさと買い物を終わらせてーー
「こんにちは長谷川さん」
聞きたくなかった声が後ろから聞こえる
振り替えれば、いつの間にやら近づいていた絡繰茶々丸
なんで声かけてるんだよこいつは、もう少し空気ってもんをーー
「何をしている茶々丸、はやくせんか」
まさかのご本人登場、感動のあまり頭が痛くなりそうだ
「はいマスター、長谷川さんを見かけましたのでご挨拶を」
「長谷川？…ああ同じクラスにいたな」
どうやら彼女の中での私はその他大勢のうちの一人程度らしい、いやいいんだが
「長谷川さんも買い物でしょうか？」
「…それ以外にスーパーに来る用事があるのか？」
「世間にはさまざまな方がいらっしゃいますので」

「あたしをそこに分類するんじゃねぇ！」
全くもって失礼なガイノイドである、親の顔が見てみたい
…脳裏に似非中国人とマッドサイエンティストが浮かんだので考えるのをやめる、やっぱ出てくんな
「さっさと帰るぞ茶々丸、油を売る趣味は無い」
「わかりましたマスター」
どうやら長話をする気はないらしく、せかす彼女について絡繰茶々丸はレジの方へと向かう
「相変わらず、なんというかなぁ…」
遠ざかっていく金髪少女ーーエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの背中を見送りながら、私はお菓子の材料コーナーへと向かうのだった

「ーーどうだった茶々丸」
「誤差の範囲でですが微弱なノイズを検知しました」
「どのタイミングでだ？」
「私が長谷川さんに話しかける直前に２回」
「あいつ自身からノイズが、か」
「先程も述べた通り微弱のため誤差の可能性も十分にーー」
「可能性があるだけでも御の字さ」
店を出てしばらくした道で、吸血鬼の主人とガイノイドの従者は話す
先程偶然出会った、あるクラスメイトについて
「くくく、あいつが怪しいから気を付けろと言うから気にはなっていたが、なかなか面白い奴じゃないか」
「マスターは長谷川さんの事をどのように？」

「あいつか?あいつはな、面白いほどに『面白くない』のさ」
　従者の質問にニヤリと笑いながら返す吸血鬼、その顔はまるで新しいおもちゃを見つけた子どものようだった
「こんなところに14年も閉じ込められて退屈していたが、どうやら暇潰しにはなりそうだな」
「暇潰しですか」
「ああそうだ。もうじき待ちに待った獲物がやって来る、その前座にでも遊んでやろうじゃないか」
　欧州に知らぬものなし、恐れられる代名詞
　600年を生きる伝説の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルはそう言って歪んだ笑みを見せた

「エヴァが長谷川さんと遭遇したみたいネ」
「あー、前から一度面と会ってみたいって言ってましたもんね」
「どうやらさらりとした初遭遇になたみたいだけれど、エヴァはかなり興味を持たみたいネ」
「うーん、長谷川さんですか。私のなかではかなり大人しいイメージがあるんですが」
「もちろんその通りネ。長谷川さんは大人しく悪目立ちしない、あのクラスのなかでは逆に目立つ性格の持ち主ネ」
　大量に設置されたディスプレイの部屋、そこに頭を白い団子のような布で二つにまとめたーー所謂包子頭の少女と、お下げに丸眼鏡と言ういかにも科学者な風貌の少女が、あるガイノイドからもたらされた情報を共有していた
「じゃああのクラスにいる一般人の一人なのでは?」
「いーや違うネ。長谷川さんは間違いなく此方側の人間、それも私と同類の人間ネ」

座っていた椅子から立ち上がり、映像が写し出されているディスプレイを眺める少女ーー超鈴音は言う
「えー…そうですかー？」
「ム、納得してないね葉加瀬」
超の言葉に納得いかない様子の少女ーー葉加瀬聡美はそう答えた
「長谷川さんはどちらかと言うと文系なのではないでしょうか、とても超と同じには…」
そう言った葉加瀬に超は
「クフフ、それは外面の話ネ葉加瀬。それじゃあ見えるべきものは見えないネ」
座り直した椅子をくるくると回して超は葉加瀬に向き直る
「もちろん長谷川さん自身が私と同類の人間とは言てないヨ。肝心なのは内側にあるものネ」
「内側、ですか？」
「そうネーー巧妙に隠したつもりかもしれないが、確かにそこにある。見えないのに見えているーー気持ち悪い物が、ネ」
「の、割には楽しそうですね超」
「当然ヨ！」
椅子をひっくり返しそうな勢いで立ち上がる超は高らかに宣言した
「彼女は私のーーいや私たちの遥か先にいる！私たちがたどり着くべき場所に彼女はもういるネ！科学者としてなんとしてでもその秘密を明かさなければならないネ！」
澄みきった狂気の目をしながら、遥か未来から過去を変え自身の運命さえも変えるためにやって来た少女、超鈴音は決して届かない宣戦布告を彼女に叩き付けたのだった

だいにわです

昨日の遭遇劇をとりあえず頭の片隅に追いやり、女子寮を出る
始業ベルまであと３０分、この時間はまだ寮の前の道路も人通りは少ない
しかし私の記憶が正しければ今週は「遅刻者ゼロ週間」だ
おそらくあと２０分ほどするとすさまじい人であふれることになるだろう
「さて、今日も頑張りますか」
普段通りの一日を普段通り過ごそうと決意して――
「……あん?」
左手首につけたものが目に入る
「…おいおい嘘だろ」
ピンク色に光っているそれは、彼らが私の生活を『お手伝いする』ために作ってくれたものの一つだ
その日一日の間に私にとって嬉しくないことが起こると、普段は白色のブレスレットがピンクに光りだし、その原因を目にするとちょっとした仕掛け――ブラシが出てきてくすぐってくる――が始動する
その名も『予感ブレスレット』
彼ら曰く
「たのしくないことがあるなら、えがおになってたのしくなるです」
と相変わらず何を言っているのか要領を得ない
だがこいつのおかげで小学校3年生からこの方「君子危うきに近寄らず」に徹することができた
問題があるとすると、一度反応した相手には反応しなくなってしまうことだろうか…
「はぁ…決意した先からこれかよ…」
今すぐ引き返してベッドに潜り込みたくなる衝動を押さえつけ、先ほどより重くなった足を引きずって私の母校――麻帆良学園女子中等部へと向かうのであった

――

（勘弁してくれよ…）
今目の前で起こっていることから目をそらしつつ、私は内心頭を抱えていた
始業時間前から、クラスのいたずら仕掛人３人が扉や教卓周りにいたずらを仕掛け終わって少しした後に
『ああそういえば新任教師が来るとかなんとか言っていたなぁ』
と思いだし、それが私にとっての厄介ごとだと理解しているときに、それは入ってきた
扉に黒板消しという古典的なトラップの仕掛けてあった扉から入ってきたのは、想像していた教師像と全く異なっていた
赤い髪に眼鏡、きっちりとスーツに身を包んでいるがその幼い顔立ちと身長
そう、どう見ても未成年どころか私たちよりも幼いのだ
そんな彼の上に挟まっていた黒板消しが落下していく
そして、私の見間違いでなければ、できれば見間違いであってほしいが――
ほんの一瞬だけ少年の上で静止した
一瞬制止した後、まるで思い出したかのように頭に直撃し、そのあとは足元の縄に引っかかり頭上から水入りバケツが落ち、３本ほどの矢（吸盤式）の餌食になり教卓に激突して止まった
仕掛け人を筆頭にクラスメートが少年に群がったところで、しずな先生が一度仕切り直し――
「今日からこの学校でまほ…英語を教えることになりました『ネギ・スプリングフィールド』です。３学期の間だけですけどよろしくお願いします」
その言葉にクラス中が大騒ぎになったところで冒頭に戻る
（特大級の厄ネタだぜまったく…）
ちらりと前を見てみれば自己紹介した少年――ネギ先生はクラスメートにもみくちゃにされていた
（作るお菓子の種類増やすか…？）
こういう時は菓子作りで誤魔化すに限る

帰りがけに追加しようかと考えていると
「――何かおかしくない？あんた」
「…あん？」
もう一度前を見るとクラスメートの神楽坂明日菜がネギ先生につかみかかっているところだった
なんだ喧嘩か？いきなり教師に暴行は流石に不味いだろ
と思っているとクラス委員長の雪広あやかが止めに入る
止めに入ったんだが「凶暴なおサルさん」なんて神楽坂に言っちまうもんだから、今度は神楽坂が「このショタコン」とか言い返して、取っ組み合いに発展してしまった
いや止めに入ったんじゃねーのかよ委員長
おまけにオジコンとか言い返してるし、相変わらずお前たち仲が悪いな
「……大丈夫なのかこのクラス？」
今に始まったことではなかったが、呟かずにいられなかった

そのあともまあ色々と酷かった
酷いというとあれかもしれないが、他に表現のしようもないのだから仕方がない
あの後ようやく授業に入ったはよかったが、先生の身長が低く黒板の上に手が届かないわ
委員長がどっから取り出したんだよと突っ込みたくなる金ぴかの踏み台を出してくるわ
何か気になったようで、神楽坂がちぎった消しゴムを先生に当てまくるわ
それをチクった委員長に筆箱をぶつけて乱闘第二ラウンドをおっぱじめたりと
どう考えても初日に新任の教師が受けるような仕打ちではないが、この学校ではよくあることなのでスルーする
「さてと、何買おうかな」
とりあえず授業が無事に終わったので追加でお菓子の材料を買い

に向かう
　何やら教室ではネギ先生の歓迎会をするとかで盛り上がっていたが、私がいなくても大して変わらないだろうと気付かれないように抜け出してきた
「チーズケーキに合うようなお菓子か…味が濃ゆいからさっぱりしているお菓子がいいかな…」
　なんて考えて歩いていると、あるものが目に入る
「あれは、宮崎か？」
　１０冊以上の本を抱えて、階段を降りようとしているクラスメートの宮崎のどかだった
　どう見てもひとりで抱えられる冊数ではない、せめて台車かなんか使えよと思い声をかけようとすると
「あっ」
　なんて短い声を上げてバランスを崩した
「クソッ――」
　駆け寄ろうとして走り出す
　だがどう考えても間に合わない距離
（使える遺留物を…ってな?!）
　そこに見えたのは杖を宮崎に向けているネギ先生だった
　次の瞬間
　今にも地面に落ちそうだった宮崎は地面すれすれで――浮いた
　そう
　まるで『魔法』みたいに

「ハァァァ……」
　自室の床に座りながら、あたしは盛大に溜息を吐いた
　あの後咄嗟に反対側の階段の影に隠れてやり過ごしたが、ネギ先生はそこに居合わせた…いや居合わせてしまった神楽坂にどこかへ連れ去られてしまったようだ
　その後のことは知らないが、助けられた宮崎は放っておいてよかったのかと良心の呵責が今になって出てきた

「まぁ…大丈夫だろ、多分」
他人の心配をしていられるほど今の自分に余裕はない
心を落ち着けるためにも、まずはお菓子作りに取り掛かろう
「ってしまった追加のお菓子の材料…もういいか今日は」
あんなことがあった後に改めて買い物に行く余裕すらないあたしは、予定通りチーズケーキのみ作ることにした
「にんげんさんおつかれのようです？」
「きょうおかしはなしですか？」
「おかしなしはとてもかなしいです」
「なんとしてでもつくってもらうです」
「呼んでもいねぇのに出てきているし…」
卵と砂糖を混ぜていると、４人ほど出てくる
「ちゃんと作ってやるから安心しろ…というかあたしのためにも絶対作ってやるから」
「やったです！」
「きょうはけーきみたいです？」
「あまいけーきがいいです」
「これはきたいだいです」
こいつらはお菓子のことになると元気になる、そしてお菓子を作ってやるとすごく喜ぶ
甘ければ何でもいいらしいが『やっぱりお菓子がいい』とは、いつ聞いた言葉だろうか
それ以来見様見真似、というよりレシピとにらめっこを続けて、簡単なものであればなにも見ずに作れるほど上達した
「良い事かどうかって聞かれりゃ、まぁ良い事に違いはねぇけどさ…」
食べさせる相手が目の前のこいつら以外いないというのは嘆くべきことなのだろうか
ヨーグルトを加えさらに混ぜたものにホットケーキミックスを混ぜながら、次は何を作ろうかと考える
「んー、次はチョコ菓子に挑戦してみるか…チョコパイ、はオーブンがいるか…」

ダマがなくなったことを確認して、炊飯釜に油を敷き生地を入れる
「こういう時は高性能な炊飯器でよかったと思うな」
ケーキコースのボタンを押して、後は出来上がるまで待つのみだ
「本当ならなんかついでに作るんだが、材料ねぇから仕方ないな」
時間があるため本棚にしまってある『面白図書鑑』を取り出す
自分の読みたい本の内容を読ませてくれるという優れもの
クラスの本の虫に見せたら大変なことになるに違いない
おまけにどの時代のどんな本でも読めるため、あの図書館島より読めるものはおそらく多いだろう
…水没していても本が読める図書館だから怪しくはあるが
「にんげんさんにんげんさん」
「…ん?どうしたきゃっぷ?」
初めて会った時、なんとなくリーダーっぽかったのでそう名付けた奴が話しかけてくる
「さきほどのことはどうするですか?」
「……」
答えにくいことを平然と聞いてきやがって…
「どうするもこうするも『無視するだ』もちろん」
「むしですか」
「どうしようもねーからな、生憎と」
首を突っ込むつもりはない、今まで通り距離を取り続けるだけだ
「あたしは、それでいいって決めたんだからな」

『なんでそんな変なこと言うの?』
『千雨ちゃんおかしいよ』
『どうでもいいじゃないかそんなこと』
『他の子と違って妙なこと言うのね』

自分が他人と違う

納得したことは一度もない
理解したかったわけじゃない
これはきっと、諦めなんだろう
「……」
「にんげんさんがそういうのならいいのです」
察したのかどうかは分からないが、きゃっぷはそのあと何も言わなくなった
「ほんと、めんどくせぇな…」
そう呟いて、あたしは『面白図書鑑』に目を落とし読書を再開した
――ついでに言うとチーズケーキは大好評だった

翌日から先生の授業が本格的に始まったが、まあ特筆するほど良くも悪くもなかった
こりもせず黒板消しをセットしていた扉からネギ先生が入ってくるが、一緒に入ってきた委員長にキャッチされ今回は不発に終わる
その後の英語の授業では例文の和訳で神楽坂が指名され、それはもう散々な目にあった
例文が長く訳しにくいものであることは分かるんだが、本人の学力の限界を大幅に超えてしまっているため『ブランチ』とか『骨が百本』とか出てきてしまった
人のことは言えないんだが
そして先生、いくらそう見えたからって教師が「英語ダメ」って言うのは良くないだろ…
なんて思っていると突然ネギ先生がくしゃみをした、それはもう盛大に
どれくらい盛大かと言えば、掴みかかっていた神楽坂の服が吹き飛ぶくらいに
……
よし！あたしは何も見なかった！いいな？
そういうことにした
～～～～～～～～～～

そういうことにしたのになぁ…
「ああーー!やめっ…やめてくださいーっ」
放課後になり、先生が大慌てで教室に入ってきて神楽坂と何やら話をした後
ネギ先生が持っていた小瓶の中身を本人に飲ませたら、さあ大変
まるで惚れ薬でも飲んだかのようにクラス中の女子がネギ先生に群がっていく
あーそういえば昔似たもん渡されたなーあんときは異性にじゃなくて動物にめっちゃ好かれたけど
なんて思っているとネギ先生が教室からダッシュで逃げていった
その後の行方は知らないが、考えるだけ無駄というものだろう
(持っててよかった『あっちいってポイ』)
厄除け用にあらゆる効果(毒を含む)を無効化するお守り袋のような遺留物だ
まさか二日目で効果を発揮するとは思わなかったが、周りの誰も気が付いていない様だ
要注意人物たちはすでに教室にいない…あぁいや一人いたか
まあこっちに目もくれずに、惚れ薬(仮)の餌食になったお嬢様見て若干動揺しているから大丈夫だろ
「…明日こそ平穏でありますように」
そう願うばかりであった

だいさんわらしいです

あのネギ先生は、色々と珍しいこの学園でも話題になるほど珍しいらしい
先生が来てまだ5日だが、学園中等部だけでなく高等部の方でも話題になっているそうだ
話題になっているらしいんだが――
「「ゴーゴーレッツゴー!!2―A!!」」
――だからと言ってなぜ高等部の先輩方とドッジボール対決をすることになってしまったのだろうか

事の始まりは昼休み時間の場所取りで、高等部の先輩方と言い争いになったのが原因らしい
その際は前の担任高畑先生が間に入って事なきを得たようだったのだが、今度は午後の授業で屋上のコート使用でダブルブッキング（高等部の校舎は隣なのでかなり怪しいが）してしまった
そこでネギ先生がスポーツで勝負を決めようと提案した
高等部11人対中等部22人というハンデ付きで、中等部が勝てばコートから出ていき昼休みの邪魔も今後しない
高等部が勝てば、なぜか知らないがネギ先生が高等部の担任になるらしい
そんな大事なこと生徒だけで勝手に決められないはずなんだが、お互いやる気になってしまっているので仕方がない
そんな中で始まったドッジボールだが、ドッジボール用のコートに22人もいれば当然密集するわけで
「開始早々7人外野行きか」
御覧のありさまというやつだ
「み、みんな固まらないで散らばって!!」
「的にされますわよ!!」
神楽坂と委員長の二人が慌てて指示を出すが、相手は背中を向けている相手に標的を変える

1人は外野送りにできたが2人目は神楽坂が止める
これだけ強いのは想定外だったが、聞けば先輩方は麻帆良ドッジ部らしく、関東大会優勝経験ありとのこと
そりゃ強いわけだわなと1人納得する
こういうのは外から見て楽しむのに限る
先輩方が『トライアングルアタック』とやらを繰り出し、主戦力の1人委員長が脱落
なるほど、三角形に布陣してボールをパスしあって攻撃する戦法らしい
名前はあれだが実に理にかなった戦法だろう
――現に今私もその戦法の餌食になって敢え無く外野行きになったわけだが
昔っからこういう運動は苦手で、もっぱら屋内での活動――読書主体だが――しかしてこなかった
友達らしい友達もいなかったし、気が付けば読書からお菓子作りにメインが移っていたりして
まぁ、楽しい時間を過ごしてきたつもりではある
そういえば明日から週末に入るから、何か大掛かりなお菓子でも作ってみるか…と考えていると2―A陣営で動きがあった
ネギ先生が何やら声をかけるとみんなやる気になっていた
その後はもう、なんといってよいのか分からない状況だった
宮崎がどこからともなく取り出した体育のルールブック集に則り高等部チームから反則を取ったり
相手が投げてきたボールをサッカー部の和泉亜子が弾丸ボレーの要領で蹴り返したり
それを真似してかバスケット部の明石祐奈がダンクシュートをかましたり
かと思えば新体操部の佐々木まき絵がリボンでボールを掴み連続アウトを取ったり――
「いやいや最後のはダメだろ流石に」
思わず突っ込んだが、流石に最後のは反則だろ

まあ先輩方の『トライアングルアタック』も、内野同士のパスになって反則だから強く言えないんだが
そんなこんなあって最終的には１０―３で中等部の勝利となった
だがそれをどうも受け入れられなかったドッジボール部キャプテンがロスタイムとか言って神楽坂にボールを投げた
それを直前に気が付いたネギ先生が間に入ってボールを体で止めた
止めたと思ったらそのボールをはじき返して、その結果先輩方の服が吹き飛んだ
……
よし！勝てたからそれでいいや！
またそういうことにした

ドッジボール事件から日にちが過ぎ、学園内は期末テスト一色になった
うちのクラス、２―Ａを除いて
正直に言えば、この学園はエスカレーター式なので中等部のテスト結果はそこまで反映はされない
だが学年トップクラス３人に１００位以内を４人出しているにもかかわらず万年最下位なのである
理由はいくつかあり、１００位圏内が７人いるが他は３００～５５０位にクラスメンバーが集中しており、さらに――
「最下位圏に５人…間違いなく足引っ張ってんだろうなぁ、あの『バカレンジャー』達が…」
時刻は２０時、２年生７３７人中３５０番台をキープしているあたしは、そんなことを考えながら自室で勉強にいそしむ
…いや自慢じゃねーからな？真ん中って自慢できるような順位じゃねーからな？
他のクラスメートは知らねーが、流石にテスト前に勉強しないほどあたしは能天気じゃない
…今日の放課後、突然野球拳始めたクラスメートは知らねーが（強

調）
カリカリと、あたしのシャーペンが書き走る音だけが聞こえる
生憎同居人は今日も不在だ
曲芸手品部に住み込んでいるらしいと聞いてはいるが、ありなのかそれは？
まあ学園側が何も言ってきていないならいいんだろうが
本来２人部屋であるところを１人で使うのは、どうにも落ち着かない
がそのおかげでこっちもある程度好きに生活できるからいいのだが
「にんげんさんおつかれのようです」
「んー？まあな」
以前自分で「さー・くりふとふぁー・まくふぁーれん」と名乗った奴が話しかけてくる
よく見る何人かが部屋の中でくつろいでいる…っておいテーブルの上のお菓子を食べていいとは言ってねーぞ
「おかしをたべるなともうされますか」
「しくしく」
「もうだめだしのう」
んな大げさな
「テストが終わったらちゃんとしたお菓子作ってやるから…せめて食べていいか聞いてくれ」
「わかりましたです」
こういうところの聞き分けはいいんだが、一週間もしないうちに破るのが玉に瑕なんだよなぁ
「それよりもにんげんさん、よいのですか？」
「ん？何がだ？」
「もうすぐあの『き』がまぶしくひかるそうですが」
「『き』？…あぁ、世界樹のことか」
そう言われて、学園中央に鎮座する巨大樹『世界樹』を思い起こすだが確かあいつが光るのは麻帆良祭中だったはずだが

「あと3か月くらいあるだろ？もうすぐって程じゃ――」
「22ねんぶりにぴかっとひかるのです」
「――あん？」
22年ぶりに？何言ってんだ？
「せいかくには21ねんぶりです？」
「ほんとうはもう1ねんごのよていだったのです？」
「いじょうきしょうのえいきょうです？」
「ちきゅうおんだんかなのです？」
「おいお前ら、だから何言って――」
「ねがいがなんでもかなう」
「ちいさなねがいからおおきなねがいまで」
「きすからせかいせいふくまで」
「あ、でもせかいせいふくはむりです？」
「そくぶつてきなものはむりなのです」
「でもあいのこくはくはかなうです？」
「にんげんさんたちのこころをわしづかみなのです」
……
「…聞きたくなかったぜそんな話！」
「これもうんめいなのです」
「勝手に話しただけだろうが！ったく…」
聞いちまったもんは仕方がない、切り替えていこう
「ま、あたしには関係ない話さ。告白するような相手もしてくる相手もいねぇし、当日近づかなきゃいいんだろう？」
「あの『き』のちかくにいればいるほどかないやすいです？はなれればこうかはうすくなるです？」
「んじゃ大丈夫か…」
少なくともあたしには関係ないだろう、他の連中はどうか知らねーが
「今のところ一番心配なのは来週の期末テストだな…」
いつの間にかいなくなっていたあいつらから気をそらして、あたしは勉強を再開した

「2―A最下位脱出しないとネギ先生がクビーーーー!?」
期末テストまであと2日という日、朝の教室に委員長の叫び声が響く
クラス中てんてこ舞いだが、ネギ先生は一応3月までの教育実習生じゃなかったか?クビも何もと思わなくもない
「とにかくみなさん!テストまでにちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ!その辺の普段真面目にやってない方々も!!」
おいあたしまで名指しするな
一応普通の点数とってるんだからな
「みんなー!たいへんだよーー!」
そんな教室に飛び込んできたのは、漫画研究会兼図書館探索部の早乙女ハルナと宮崎のどかだった
「ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……!」
そう言って特大の爆弾を落としていった

話を聞けばネギ先生とテスト最下位組は勉強するために図書館島に向かったそうだ
夜遅くに
もうその時点で何しに行ってんだと言いたくなるが、その最中に図書館島名物のトラップに引っかかってしまい行方不明になってしまったそうだ
一応ネギ先生もいるし、おそらく大丈夫とは思うが…
(仕方ねぇな…)
せめて無事かどうかだけでも確認するべきだろう
あれでも担任とクラスメートなのだから
教室から気付かれないように出ていき、空き教室に入る
「確かこのかばんに…お、あったあった」
持ち運んでいるかばんから紙とペン状のあるものを取り出す
「えぇっと図書館島に行ったのは…『ネギ・スプリングフィールド』『神楽坂明日菜』…」

広げた紙に遭難メンバーを書き込んでいく
「…『綾瀬夕映』に、あと『近衛木乃香』っと…あれ？」
今気が付いたが近衛も遭難しているのか
「何やってんだよお目付け役さんよぉ…」
いやあの近衛のことだ、気付かれずにこっそり抜け出したとかそんな感じだろ…なおのこと良くはないが
「とりあえずこれで全員だなっと、あーこほん…『ひょっこりさんひょっこりさん、みんなの居場所を教えてください』」
ペンを持ったままそう呟くと、ペンが勝手に動いて名前の横に文字が書かれ始める
その名も『ひょっこりペン』
落とし物や迷子が『ひょっこり』出てくる遺留物だそうだ
「えぇっと何々…『地底図書室』？」
全員が同じ場所を指示した
「とりあえず全員無事か…」
このペンは落とし物や迷子が『存在しなくなっている』と何も書かれない
全員書かれたということは皆命に別状はないと考えていいだろう
「…これなら大丈夫か」
もしもテスト当日になっても戻ってこなければ最悪学園側に知らせざるを得ないが、おそらくこのことは学園も把握しているだろう
「とりあえずやる気になっている委員長の言うとおりにしますかね」
ああなった委員長はもう止められない
抜け出したことがバレる前に、さっさと戻ろうと空き教室を出て
扉の向こうに立っていた誰かにぶつかりそうになった
「っ…?!」
「……」
褐色がかった肌、特徴的なピエロのペイント
ここ最近教室でちらりと見るだけで、まったく言葉を交わしていなかった
クラスメートにしてあたしのルームメイト

『ザジ・レイニーデイ』が立っていた

『あーハジメマシテ？』

『……』

この女子中等部に入ることになり、ルームメイトになった彼女と初めて交わした言葉はそれだった

交わしたといってもあたしの方から一方的に話しかけただけで、相手からの返事は一言だけだった

『きょ、今日からヨロシク…』

『…よろしく』

あたしが憶えている中で、本人の声を聴いたのは後にも先にもこの時だけだった

接点はクラスメートでルームメイト、ただそれだけ

その日から彼女は部屋に戻らなくなった

部室に泊まり込んでいるとクラスの誰かが言っていたのを聞いて、それっきりだ

あたし以上に、クラスでは浮いた存在

そして――

『予感ブレスレット』が反応した相手――

彼女も、『そっち側』の人間だった

「……」

「……」

き、気まずい…

できるだけ小声であの言葉をつぶやいたつもりがだ、もし聞かれていたら色々と厄介だろう

いやそうでなくとも、空き教室でなにやっていたんだと思われても仕方がない状況だ

何か言おうと、と思っていると

「…委員長が」

「…え？」

「…委員長が探してた」
そう言って先に歩き始める
…あ、あぁなんだ呼びに来ただけか
少し安心して、あたしも教室を出る
「……」
「…あーレイニーデイ？」
「…なに？」
名前を呼ぶとレイニーデイは振り返った
「…ありがとうな、わざわざ」
「……」
無表情で見つめてくる彼女の瞳は、初めて会った時と同じ色をしていた
「…どういたしまして」
そして今、あたしは初めて彼女の笑った顔を見た

結果から言うと遭難していたメンバーは、期末テスト開始ギリギリになって中等部にやってきた
一応間に合ったということだろうか、その後別の部屋でテストを受けたようだ
そして迎えたクラス成績発表の日
結果は――最下位
と思っていたのだが、その後学園長が採点ミスしたとか何とかで再集計
聞いて驚き、なんと万年最下位の２―Ａがここにきてトップの成績となった
トトカルチョは大混乱の阿鼻叫喚、２―Ａにかけていた面子が逆転勝利という前代未聞の事態となった
「だから何だって話だがなぁ」
結果を見届けた後、あたしはさっさと下校した
期末テスト発表が終われば、後は明日の終業式で長いようで短かった２年生も終わりだ

春休みに入ると次学年向けの宿題も出されるので、のんびりとした長期休暇とはいかないだろうが
２週間ほどの休みの間に、今度は何のお菓子を作ろうか思案して
いつも通りに部屋に入り、あたしは実に２年ぶりの出迎えを受けたのだった

目新しく増えたものはなく、本棚に本が数冊とお菓子作り用と思われる調理器具がいくつか新しく追加されているだけの、どこか殺風景な部屋を見渡す
ここに入るのは実に２年ぶりのこと
あの日以来部室の荷物をもっていってからこの部屋に入ることはなかった
理由はいくつかある
私の目的によるものが一番だったが、次いで理由となったのがルームメイトのことだった
オレンジ色の長髪を後ろで束ね、目が悪いわけではないのに丸い眼鏡をかけている少女――長谷川千雨
どこから見ても、誰から見ても普通の中学生
注意深く見たところで、おそらくこの学園のほとんどの人間はそれ以上の評価を出すことはないだろう
そんな彼女に興味がわいたのは、今から２年前の中等部入学式でのことだった
私の前に座っていた彼女は、きちんとした姿勢で特段変わった容姿でもなく入学式に臨んでいた
あえて変わっているところを挙げれば、彼女の左手に薄いピンクのブレスレットが付いていたことぐらいだった
そんな彼女があるタイミングで顔を若干しかめた
後ろからだったのでよく見えなかったが、学園長が登壇した時間違いなく表情が曇った
その時、私は見た
彼女がつけていたブレスレットが、ピンクから白に変わる瞬間を――

私はその時から、彼女を注意深く見た
そしてこの部屋で私と話をしたとき
彼女のブレスレットが、同じように色を変えるのを見たのだ
――彼女はきっと、何かを隠している
それは学園側としてではなく、ましてや私たち側でもない
もっと別のなにかだ
期末テストの前にクラスから出た彼女の後を追った
見つけた時にはもう何かをし終えた後だったようだ
彼女の力を見極めなければいけない
この部屋に何かがある、そう考えて2年ぶりに戻ってきた
ふと彼女の机の上に置いてあるものが目に留まる
長方形の白い花瓶に、花弁の閉じた花が一輪だけ刺さっていた
――私はそれがどうしても気になって
まるでそうするのが正しいような気がして
その花瓶に手を――

「にんげんさんじゃないにんげんさんなのです?」

咄嗟に後ろを振り向き声の聞こえた方を見回す
――部屋の中には私一人だ
そこを見ても、なにもいない
でも今、確かに私に対して何かが話しかけてきた
今聞こえた声は…?
その時、部屋の鍵が開く音がした

「時間切れ、ですね」
短くそういうと、あらかじめ用意していた本を持ち自分にあてがわれている机に向かう
――収穫はなかった
だが、これで確信に近づけた
彼女は間違いなく何かを隠している
「それがもし、私たちと相反しないものであったら――」
――あなたとはお友達になれるといいですね、長谷川さん

部屋に入って私を出迎えたのは、ルームメイトのレイニーデイだった
なんでも一冊だけ見当たらない本があり、念のためとこの部屋に探しに来たそうだ
お目当ての本は無事に見つかったようで、特に話もせず部屋を後にしていった
「2年以上放置していた本がこの部屋で見つかる、か」
どうにも怪しいと思った
だが特段机の上や本棚を触っていたような様子も見られず、少なくともその言葉を信じるほかないようだった
「っと、こいつもつけてっと」
机の上に置いてある花瓶――に刺さった花を2回つつくと、それまでしぼんでいた花弁が開き満開になる
「おーいお前ら、出てきていいぞー」
「やっとでられるです？」
「きょうもきゅうくつだったのです」
「あしたのとうばんはKはんです」
「りょうかいです」
「あしたがおわれば、にんげんさんのおやすみがはじまるです」
「そうすればおかしてんごくです」
「とてもたのしみです？」
ぞろぞろと部屋の隅からあいつらが出てくる

今しがた起動させたのは遺留物の1つ『フラワーアンテナ』
周辺に飛んでいる電波を1つ残らずキャッチして、特定の範囲内から遮断するというものだ
花がしぼんでいるときは無効化されるので、見るだけでよくわかる仕様となっている
「新学年か、今から気が重いぜほんと…」
おそらく平穏とは程遠いことになるであろう新学年に思いをはせつつ
目の前ではしゃぐ彼らに今度はどんなお菓子をふるまおうかと、あたしは考えるのだった

だいよんわだったらしいです

ついにやってきた終業式
波乱万丈だった2年生も今日で終わりと考えると、少し寂しい気がしないこともない
「おはようございまーす、えーっと…長谷川さん！」
ここ最近よく聞くようになった声が、後ろから聞こえてくる
それ以外にも2―A（うちのクラス）の騒がしい何人かの声も聞こえる
「…おはようございます先生」
そんな朝のテンションについていけないあたしは軽く会釈をして、通り過ぎていく副担任を横目で見る
「んー♡2―Aでも特に目立たない方の千雨ちゃんまで覚えているなんて、教師の鑑っ！」
ラクロス部兼まほらチアリーディング部の椎名桜子が去り際にそう言っていく
「…悪かったな目立たなくて」
悪気がないのは分かっているし、自分でも目立つ方じゃないのは重々承知しているつもりだ
その方が楽でいい
誰にも近寄らず、誰にも近寄らせない
自分のからの中に閉じこもってしまえば
私は平穏に暮らせる
あたし1人が我慢すれば…
「…だーっ！暗いこと考えんじゃねー！」
頭をぶんぶんと振って一度思考を吹き飛ばす
もう全部終わったことだ、今更ぐちぐち言ったって意味がない
「とにかく明日から春休みなんだ、新しいお菓子に挑戦するって決めたばっかりだろ」
ネガティブな考えはお菓子で吹き飛ばす
今までそうやってきたんだ、これからもそれでいい
「…つーかあいつらえらく急いでいたな、遅刻する時間でもねーのに」

すでに視界から消えていた2―Aメンバーを思い返し、あたしも中等部へと向かうのだった

「フォフォフォフォ、皆にも一応紹介しておこう――新年度から正式に本校の英語科教員となるネギ・スプリングフィールド先生じゃ」
3学期修了式の壇上で近衛近衛門学園長がそう言った時、あたしは軽く眩暈を覚えた
いや、想定してしかるべきだっただろうと言われれば、まったくもってその通りでしかない
「ネギ先生には4月から『3―A』を担任してもらう予定じゃ」
その言葉に生徒たちは割れんばかりの拍手で答えた
(…こりゃ本当に腹決めるべきか)
若干グロッキーになりながら、あたしは壇上の新担任に目をやり世界を呪った

「というわけで2―Aの皆さん、3年になってもよろしくおねがいしまーす!」
教卓に立つネギ先生がそう言うと、クラスメイト達は次々に祝福の言葉をかけていく
しかしいまだに万年ビリの2―Aが、学年トップになってトロフィー貰えたなんて信じられない
(あの『地下図書室』とやらでなんかあったんだろうが…それだけであのメンツが高得点取れるのか?)
大概失礼な考えではあるが、あの5人組が(1人を除いて)そんなすぐに成績が伸びるとも思えなかった
(単純に『ネギ先生』の教え方がうまかったから、で説明がつけばいいんだがなぁ)
そんなことを思っていると
「ハイッ、先生ちょっと意見が!」
「はい鳴滝さん」
双子の姉の方の鳴滝風香が、珍しくネギ先生に質問する

「先生は１０歳なのに先生だなんてやっぱり普通じゃないと思います！」
その言葉に教室がざわっとする
（うん、そうだな。先生と並んでいると「小学校のお友達同士かな？」って間違われるやつが言うとと説得力あるな）
内心で毒を吐く、ずいぶんまがった性格だと実感はしている
「えーと」
「それで史伽と考えたんですけど――」
と双子の妹の風見史伽も立ち上がって
「今日、これから全員で『学年トップおめでとうパーティー』やりませんか!?」
そう言った
「おーそりゃいいねぇ！」
「やろーやろー♡」
「じゃ、ヒマな人寮の芝生に集合！」
……
（前振り、関係ねーじゃねーかよッ！）
内心盛大に突っ込むが、このクラスでは多々あることなのでもう驚きもしない
（あーダメだもう2年同じクラスだが、このノリにだけはついていけねー…）
額を抑えてうんうん唸る、万年こんなノリなんだついていけないのも仕方がない
「――ん？」
しかしパーティーねぇ…
ただでさえ羽目を外しがちなこのクラスが、そんなことしたら大騒ぎどころじゃねーぞ…
「どーしたんですか長谷川さん、どこか痛むんですか…？」
1人で考え事をしているといつの間にかネギ先生が立っていた
「（やっべ考え事に没頭しすぎて気が付かなかった…）あーいえ別に…」

そう誤魔化しはしたがこの先生のことだ、色々と気にして聞いてくるのは想像に難くない
「すいません先生、今日はちょっと気分が優れないので帰宅します」
そういってさっさと鞄をからうと教室を後にする
後ろから「え…あ…ちょっ」なんて先生の声が聞こえるが無視する
後でこっそり抜け出せばいいものを、どうしてこう目立つような真似すんだか…
女子中等部を出て寮へ向かう途中、自分の行動にうんざりしていた
目立ちたくないとか言って、もう少し上手な生き方もできるだろうに
「不器用なんだか生き方が下手くそなんだか…」
…あのクラスでそもそも目立たないようにするというのが、間違ってはいる気がするが
「はぁ…気が重いなぁ…」
なんて弱音を吐いていたら
「は…長谷川さーん!!」
後ろから聞こえてきた新担任の声に、思わず「うげっ」と唸る
女子中等部を出てだいぶ時間がたっているが、よく追いつけたな先生
「…何か用でしょうか?」
「ハァ…ハァ…あ、あの…さっき体調が優れないって言ってたので」
そういって先生は懐から何か取り出した
「これ、おじいちゃんからもらった超効くま…サプリです。おひとついかがですか?」
効きますよーなんて無邪気に言うな
つーか一瞬何を言いかけた何を
「…ありがたく1つ戴きますね」
断ると面倒なので一錠だけ貰う
「あ、あの…パーティーには来ないんですか…?」
ポケットに錠剤を入れると、不安そうな声で先生が聞いてくる
「ええ、まぁ…私パーティーとか人が多いところは苦手なので…それ

に」
「そ、それに？」
「…非常に個人的な理由ですが、あのクラスになじめていませんので」
いいクラスなのは分かるんですがね、と心にもないことを言って寮のほうに歩きだす
「あ…じゃ、じゃあこれを機に皆さんと仲良く…」
「すいません、今のところそういうつもりはないので、失礼しますネギ先生」
妙にぐいぐい来る（考えれば自分の担当生徒がボッチだから当たり前だが）先生を無視する
がその程度で諦めるような先生ではなく、女子寮の私の部屋の前までついてきて説得を続けていた
「――それでは先生、パーティー楽しんでください。さようなら」
そう言って扉を閉める
部屋に入るとドッと疲れが出てくる
先生は何も間違っていない
私がただ決心をつけられていないだけなのだ
この街を受け入れるという決心が
だが――
「――そう簡単に、受け入れられるかよ」
逃げに逃げ、耳も目も塞いできた
この街のおかしさを感じながら
あたしは自分に嘘をつき続けてきた
あいつらに出会って、色々な遺留物を手にしてきてもそれは変わらなかった
「…やーめだやめだ、お菓子でも作ろう」
できたお菓子はあいつらに食べてもらえばいい
冷蔵庫の中には今まで作って余った材料がある
消費期限が近付いているものも多い
「バターと牛乳に板チョコ…あー小麦粉も結構あるな…よし、あれでも作るか」

とりあえず２０個ほどを目安に作っていく
小麦粉、ベーキングパウダー、バターを混ぜていく
「『ｒｕｂ　ｉｎ』…だったか確か」
すり合わせるようにバターと小麦粉を混ぜていくことを、イギリスではこういうらしい
これの出来次第でこいつのできばえが変わるとか
パン粉のようになった生地に砂糖と刻んだチョコレートを加え
さらに牛乳を入れて混ぜ、まとめ上げていく
粉っぽさがなくなったら生地を２ｃｍの厚さに広げて型抜きをしていく
本当はオーブンを使うのだが、流石に麻帆良学園の寮とはいえオーブンはないのでトースターで代用する
２０分ほどで焼きあがるので２回に分けて焼き上げていく
「んーやっぱりオーブン無いとレパートリーに限界があるな…寮監に掛け合ってみるか？」
さすがに個室には置かれないだろうが、共用のリビング辺りになら置いてくれはしないだろうか
「新学期に合わせて、には遅すぎるか…うーんしかし来年になると――」
「あ、このボウルはどうしますか？」
「ん？あーそれは洗いますね、生地はもうこっちに、移し、て……」
「？」
渡されたボウルを何の気なしに受け取り、違和感が
ちらりとボウルがやってきた方を見てやれば――
「…あえて聞きますが、どうしているんですか『先生』？」
「あ…すいませんドア開いていたので」
…鍵のかけ忘れには気をつけよう、そう強く決心した瞬間だった
「はぁぁ…パーティーに参加されるんじゃなかったんですか？」
「えっと、ここに来る前に皆さんから『準備の時間があるから』と言われていまして」
なるほど、だからあたしの後を追ってきたんですね

「…一応生徒の部屋ですので、入る際には声をかけてくださいね先生」
「す、すいません。ただ――」
――長谷川さんがとても楽しそうで、声を掛け辛かったんです
「…理由になってませんよそれ」
まったくと言って本棚から本を取り出す
「時間になったら出ていってくださいね先生」
「あ、ハイ…」
先生をガン無視して読書を始める
呼んでもいないのだから客でもなんでもない
居たければいてもいいが、あたしは関わらないぞ
「…あ、あの長谷川さん？」
「…なんですか？」
「今作っているのは…？」
『スコーン』です、チョコ入りの」
「へー…え？ス、スコーンですか？」
「ええ…トースターで焼いていますが」
そういうと意外そうな顔をする
なんだ、あたしがお菓子作ってるのがそんなに意外か？
「…今焼いているもの以外に、この生地の分も焼くんですよね？」
「もちろんですが」
「…見た感じ後１０個くらい作れそうなんですが？」
「まぁ、作れますね」
「…あの――」
「一人では食べませんよ流石に」
「……」
…なんだよその『ちょっと信じられない』みたいな顔は
「余りはしないです、一応あてはありますので…だから大丈夫ですよ」
「そう、ですか」
そんな話をしているとチンっとキッチンの方から聞こえてくる
どうやらお目当てのものはできたようだ
「できたみたいなので、ちょっと見てきますね」

「あ、はい」
そういって席を立ち、キッチンに向かう
トースターの中から完成したスコーンを取り出す
中に入れていたチョコの香りが漂ってきて、とてもおいしそうに出来上がった
『スコーンは冷めたほうがおいしい』か…これはしばらく冷まして――」
「長谷川さん」
取り出したスコーンをテーブルの上に置くと、リビングの方にいたネギ先生が話しかけてくる
というかいつの間にキッチンに入ってきたんだよ…
「なんでしょうか先生？」
「このスコーン…いただけないでしょうか？」
「…はぁ？」
何を言い出すんだこのちびっこ先生は
「こんなにおいしそうなスコーン、クラスの皆さんにも食べてほしいと思って…」
「……えぇ？」
食べる？何を？あたしのスコーンを？誰が？うちのクラスメイトが？
「い、いやいやいやいや!!うちのクラスメイトにって、マジで言ってますかそれ？」
「はい…ダメ、でしょうか？」
「いやダメってわけじゃないですけど…」
もともとあいつら以外に食べさせるつもりはなかったからいいが、選りに選ってうちのクラスメイトかよ…
「う、うーん…」
「……」
「……はぁ、わかりました、ただしこの１０個だけですよ？それでいいですね？」
「――はい！ありがとうございます！」

そういうとスコーンの入ったお皿ごと持って部屋から出ていってしまった
「…あー押し切られた感がヤバい…」
キッチンの椅子にドサッと座り込む
悪手を打ったか、いやお菓子位大丈夫と見るべきか
「…あ、しまった」
部屋に帰ってきてから『フラワーアンテナ』を起動させるのを忘れていた
「スイッチオンっと」
そういって起動させると、あいつらがぞろぞろと出てくる
「ようやくでられますな」
「きょうはおかしつくるよていでしたか？」
「いいえあしたからだったはずです？」
「きょうはらっきーでしたな」
「でもはんぶんなくなったです」
「うれしさもはんぶん」
「たのしさもはんぶん」
「でもはんぶんある」
「それはかならずいただくです」
今日も今日とて騒がしいが、相変わらずお菓子のことに話題がいってる
「オーケーオーケー、あと２０分待て。おいしいスコーンが出来上がるからな」
「すこーん！」
「なつかしのあじ」
「にんげんさんがつくってくれたはじめてのおかし」
「とくべつなそんざいです？」
「きゃんでぃーではなくすこーんですから」
――懐かしいこと覚えてるなこいつら
見様見真似で初めてこいつらに作ったお菓子
最初は写真通りに膨らまなくて、おまけに砂糖の分量が少なくて全

然甘くなかった
初めてとはいえこいつらは甘くなく
『こんごにきたいするです』
とばっさりと切り捨てられた
その後は何とか汚名を返上したが、今となってはあれもいい思い出になっていた
「ま、なるようになるってね」
そういって型抜きし終えた生地を新しくトースターに入れ、残りのスコーンを焼き始める
焼き終わるまで読書を再開――と思ってふと外を見てみる
天気は快晴、絶好の外出日和だ
すると下から声がする
下の方を見てみると――
「げっ」
そこにいたのは2―Aメンバー
どうやらそこでパーティーを行うようだ
そこに主役のネギ先生があたしの作ったスコーンと一緒に現れた
クラスの連中にいい感じに冷めたスコーンを配っている
半分ずつに分けてその場にいた全員が食べている
声は聞こえない、だがその表情はどうやらそこまで悪くない評価をもらったようだ
くるりとネギ先生がこちらを向き、大きく手を振る
それにあたしは――柄にもなく――手を振り返した
「まぁ、こういうのもいいかな」
――ほんの少しだけ、来年度からの新学年に希望が持てた日になった

第2章：にんげんさんの大仕事
だいごわですよ

『キーンコーンカーンコーン…』
「3年！A組!!」
「「ネギ先生ーっ♡」」
新年度開始早々喧しい…失礼、騒々しい挨拶から始まったうちのクラス
教卓には正式に担任となったネギ先生が、照れくさそうに頭をかいている
「えと…改めまして、3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間、よろしくお願いします」
「はーい！よろしくー♡」
とりあえず特に問題なく新学年は始まった
しかし今年度は修学旅行という大きな行事もあるが、新任の先生に任せて大丈夫なのだろうか
そうでなくてもこのクラスは色々とやらかす未来が見えるが
しかし、どうにも嫌な予感がする
そういった遺留物はつけていないが、なんだか想定外のことが起こりそうな予感がして仕方がない
そんな風に考えていると、教室にしずな先生がノックをして入ってくる
「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3―Aのみんなもすぐ準備してくださいね」
「あ、そうでした！ここでですか!?わかりましたしずな先生！」
…一応担任なんだから、そこは把握していて欲しかったなぁ
「で、では皆さん、身体測定ですので…えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください！」
そしてテンパると突拍子もないこと言いだすのもやめてほしい

「ネギ先生のエッチ～～ッ♡」
「うわ～ん！」
『間違えました！』と言って慌てて出ていく先生を確認すると、クラスメートたちは準備を始める
「ネギ君からかうとホント面白いよねー♡」
「この一年間楽しくなりそーね」
…一応担任なんだから、そういうことはやめてやれ
「あれー？今日まきちゃんは？」
「…さあ？」
「まき絵は今日身体測定アルから、ズル休みしたと違うか？」
「まき絵胸ぺったんこだからねー」
「お姉ちゃん言ってて悲しくないですか？」
なんて言う話が聞こえてくる
そういえば佐々木まき絵が来ていない
元気が取り柄のあいつが珍しい
体重測定で大騒ぎしていると
「ねえねえところでさ、最近寮ではやっている…あのウワサどう思う？」
「え…なによソレ柿崎」
「ああ、あの『桜通りの吸血鬼』ね」
少々気になる話題が聞こえてきたので、ちょっと聞き耳を立てる
「しばらく前からある噂だけど…何かねー満月の夜になると出るんだって、寮の桜並木に――」
――まっ黒なボロ布に包まれた…血まみれの吸血鬼が…
まほらチアリーディング兼コーラス部の柿崎美砂のその言葉に、あるものは怯え、あるものは興味深そうにうなずき、あるものはデタラメだと切り捨てた
「――そのとおりだな神楽坂明日菜」
そんな大騒ぎの教室に、めったに聞かれない声が流れる
「ウワサの吸血鬼はお前のようなイキのいい女が好きらしい、十分気をつけることだ…」

「え…!?あ…はぁ」
ありゃーエヴァちゃんから話しかけるなんて珍しーという声が聞かれるが、確かに珍しい
普段は教室でひじついているか、そもそも教室にいないかのどちらかなのだが
すると廊下が騒がしくなる、廊下側にいたメンバーが突然窓と扉を開けた
下着姿のままでだ
「…なにやってんだあいつら」
いくら女子校だからってもうちょい気にしろよ…
しかし『桜通りの吸血鬼』ねぇ
該当者一名、ついでにお供が一体
しかもうれしいことにどっちもうちのクラスメイトときたもんだ
これは笑えるな、はっはっは
…ず、頭痛がする
ほぼ間違いない、今しがた話題に上がった「桜通りの吸血鬼」はあいつに違いない
動機は分かんねぇが、ろくでもないことに違いない
触らぬ神に…この場合鬼か、祟りなし
この件は知らぬ存ぜぬで押し通す
平穏無事が一番だ

そう思っていた自分を思いっきり殴ってやりたくなった
「どうした?まさかもう諦めたわけじゃないだろうな?」
立ちふさがるように、黒いローブを身にまとったそいつは言った
「…万事休すだなこれは」
「あうぅ…」
背後で震えているクラスメイト――宮崎のどかが小さく唸る
「何もしてこないのなら…その血、頂くとしようか」
冷や汗が全身から吹き出てくる
今まで遠目から非常識を見てきた

だが今のように、目と鼻の先にまで近づいてきたことはなかった
挽回策を必死に考えながら、こうなってしまった経緯を思い返していた

「やべぇ…新しいお菓子の本探していたらこんな時間になっちまった」
すっかり日が落ち夜空には満月が覗いていた
早く帰んねーと門限に引っかかっちまう
と思って桜並木の街道――桜通りを小走りで進む
「吸血鬼…吸血鬼か…」
後々話を聞くと、あの時クラスメイトが騒いだのは佐々木まき絵が桜通りで倒れて見つかったからだそうだ
ネギ先生は貧血だろうと言ったらしいが
「本当に血を吸ってるのか…?」
だがそうすると吸血鬼による実害が出たことになる
昨日の今日だから、すぐには動かないだろうが学園も何かしらの対策をとる
…はずだ
さすがに動かないなんてことはないだろう、と考えながら走っていたせいか
「おぉあ?!」
「きゃ…!」
目の前を歩いていた誰かに危うくぶつかりそうになる
「す、すみませんちゃんと前を見ていなくて…って宮崎じゃねーか」
「ふぇっ…は、長谷川さんでしたか…あふぅ」
「いや人の顔見て脱力されても困るんだが」
「す、すみません…てっきり吸血鬼さんかと…」
なんだよ吸血鬼「さん」って
「つーかいつのもメンバーはどうしたんだよ一体」
「えっと…用事があるから私だけ先に…」
「おぉう…そうか…」

気が弱そうなんだがこういうところはアグレッシブだなおい
「まあ分かった、どうせ一緒の道だから一緒に――」
ザァァァっと、風が桜通りを吹き抜けていく
「――ほう」
背後から、声がする
幼さを残しながら、威厳を含んだ冷酷な声
後ろをゆっくりと見てみれば――
「――２５番長谷川千雨」
ああ――
「２７番宮崎のどかか…」
本当に今日は――
「悪いが少しだけ、その血を分けてもらおうか」
最悪の厄日だぜクソが!!
「――走れ宮崎!!」
「…ふぇ?!」
呆けていた宮崎の手を引いて走り出す
(不味いっ…このタイミングで来られるとはっ!!)
甘かった、昨日の今日だからと油断していた!
無理をしてでも早く帰るべきだった!
(考えろ!考えろ!考えろ!いつもと違う、宮崎も一緒に逃げられる方法を!)
「鬼ごっこか?生憎と――」
後ろから聞こえてくる声をひたすら無視しながら走り続けるが
「付き合ってやる気はないのでな!」
バサッと何かが羽ばたくような音がする
「は、長谷川さーん!あ、あの人と、飛んできてますよー!」
「んなっ?!」
宮崎がそう叫ぶので首だけ回してみてみると――
飛んでいる
黒いローブをまといながら、確かに飛んでいた
――その一瞬のスキが、命取りとなったのだろう

「――油断大敵だぞ？」
「は？…ってうぉあああ?!」
至近距離から声が聞こえたと思ったら真横に黒ローブがいて転ばされた
何言ってるのかわからねぇと思うが、何をされたのかは分かった
そして転んだことで完全に逃げられなくなったことも――
「さて――」
黒ローブはあたしたち2人の目の前に立って
「――チェックメイト、というやつだ」
黒い帽子の下から嗤いを覗かせた――

人気のない桜通りで、あたしたちは絶体絶命のピンチを迎えていた
（どうする！使えそうな遺留物はない！どうする…どうする！）
「手古摺らせてくれるなよ？私も余裕はないのでな」
そう言いながら近づいてくる黒ローブ、後ろの宮崎が顔を伏せる
――せめて宮崎だけでも…！
（にんげんさんおなやみですか？）
そう決心しようとしたところに気の抜けた声が聞こえてくる
…そうだ！
（ああそうだ！頼む！宮崎を助けられる遺留物を――）
（そういうことですたら）
（おまかせあれ）
（ついでににんげんさんもたすけてやるです）
お、おう…ついででもなんでもいいから頼む
（ひさかたぶりのしんどうぐ～）
（われわれのどうぐ、おやくだち）
（さしあげさしあげ）
そう言ってするりとあたしの左手にそれを出してきた
六角形の柱のようなキーホルダーサイズの――
（っておいこれどっかで触ったことあんぞ）
具体的に言うと、特にこれといって面白みのないお土産店のキーホ

ルダーコーナーで
（小さなおみくじキーホルダーじゃねーか触った感じ）
（おーさすがにんげんさん）
（さわっただけでわかるとはさすがです）
（いいから！使い方の説明！）
今褒められてもうれしくねぇんだよ！
（ちいさなおみくじ『くるくるみくじ』）
（ふればくるくるふくがくる）
（だいきち・ちゅうきち・きちにしょうきち）
（でももしかしたらうれしくないかも）
（きょうにだいきょう）
（ひいたものが）
（にんげんさんのしあわせです？）
…待て、おい待て
（ハズレ付きかよ!?選りにも選って?!）
（すりるはひつようですので）
（さいきんのこどもたちはぬるまゆにつかりすぎです）
（かつのがあたりまえなじんせいは、そんざいしないというのに）
現代社会に嘆いている場合か!!
（…万が一凶とか大凶引いたらどうなるんだよ？）
（0えふにかぎりなくちかいじょうたいをそうぞうしていただければ）
（ふざけんじゃねぇ!!）
「神への懺悔は終わったか？」
なんてバカやってるとすでに黒ローブが目の前にまで来ていた
（…えぇい！一か八かだ!!）
左手に持ったそれを3振りほど上下させる
すると中から一本おみくじが出てきた
（大吉なんて贅沢は言わねぇ…せめて小吉以上を…！）
伸びてきた手から逃げるように、あたしは目を瞑った
あたしの賭けの結果は――

「――風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ!!」（ウンデキム・スピリトウス・アエリアーレス・ウインクルム・フアクテイ・イニミクム・カプテント）

この場に乱入してきた、どことなく頼りなかった新担任によってはっきりとした

（か、勝った……！）

左手におさまった遺留物から覗く『吉』の字が、それを指し示す

「魔法の射手・戒めの風矢!!」（サギタ・マギカ・アーエル・カプトゥーラエ）

――満ちる月下の大通りで

今、二人の非常識（非日常）がぶつかり合う――

だいろくわですから

「――っは！出来のいい『幸運』だなまったく！」
躍り出てきたのは、普段から持ち歩いている長い杖を構えたあたしたちの担任――ネギ・スプリングフィールド
杖の先から光の矢のようなものが噴き出し、黒ローブに向かっていく
しかしそれはすべて黒ローブの直前で跳ね返された
「僕の呪文を全部跳ね返した!?」
先生の驚きの声が聞こえてくる
「…クソッ！」
先生はあたし達から距離を取っているが、いつこっちにアレが飛んでくるか分かったもんじゃねぇ！
「宮崎、立てるか？」
「は、長谷川さん…何とか…」
若干震えているが、何とか移動できそうだ
「ここから逃げるぞ、寮までまっすぐ止まるなよ」
「えぇ?!で、でもネギせんせーが…」
「先生なら大丈夫だ、あの変質者をとっ捕まえてくれるさ」
とにかく今はここから離れることだけを考えなければ
「いくぞ宮崎！早くここから…！」
そう言って寮への道を見ると
身に覚えのあるシルエットがこちらを見ていた
「…勘弁してくれよ」
頭に2本のアンテナを付け
まるで人形のような関節をした
黒ローブとよく一緒にいるクラスメイト
「幸運とかけ離れてるな…！」
「こんばんは長谷川さん、宮崎さんもご一緒で」
普段と変わらない無表情で、そいつ――絡繰茶々丸は言った

前門の鬼、後門の人形
どちらに行っても逃げ道はない
最悪の状況からは、まだ脱していなかったのだ
「え…？か、絡繰さん?!」
黒ローブと対峙していた先生が、意外な来訪者に驚く
「ネギ先生もこんばんは」
そんな様子の先生に欠片も動揺せず、絡繰はぺこりとお辞儀をした
「――不意打ちとはいえ、驚いた」
被っていた黒の帽子を外しながら、黒ローブは先生に称賛の声を掛ける
「凄まじい魔力だな…」
長い金髪、赤い唇、覗くとがった犬歯
よく見かける彼女とどこか違いながら
よく見る彼女と大差ない姿
「えっ…き、君はウチのクラスの…」
にやりと口を歪ませ、先ほどの攻撃で傷ついた指から滴り落ちる血を舐め取る
どこか魅了されそうになる面妖な面持ちでそこに立つ彼女の名は

「エ、エヴァンジェリンさん?!」
夜の帳は、静かに降りていった

「……」
「…通してくれそうにねぇな」
後ろの方で話を始めたネギ先生とマクダウェル
逃げ出すなら今のうち、なのに――
未だに無表情でこちらを見つめる絡繰
（どうする…後ろの二人がドンパチ始めたら、今度こそ終わりだ…）
流れ弾一発で命に関わる
ネギ先生が来ても、形勢は変わらずか…
（にんげんさんにんげんさん）

（ん？どうした一体？）
突然話しかけてくる、また何か遺留物でも見つけたのか？
「…ノイズ検知…極微弱…誤差範囲と認める…記録継続…」
……
な、なんかぶつぶつ言いだしたが…無視だ無視
（で？なんだ？なるべく手短に頼むぞ）
（さきほどのおみくじのせつめいがまだおわってなかったです）
（しようじょうのちゅういをよくよみ、ようほうようりょうをまもってただしくごしようください）
（わかったわかった…んで、説明の続きは？）
（こうかのけいぞくじかんについてです）
（継続時間？）
（そうです、このおみくじのこうかはきっかり「２０ふん」です）
（それをすぎるといつもとおなじ）
（へいへいぼんぼんなせいかつがまっているのだ）
…継続時間は２０分？
「うわっ！」
パキィンという音とともにネギ先生が叫ぶ
見ると先生の周りに氷のようなものが散らばっている
「抵抗（レジスト）したか、やはりな…」
不味い…本格的に不味い
だがどうやら、先ほどのおみくじの幸運は想定以上の効果を発揮してくれたようだった
「何や今の音？」
「あっネギ!!」
絡繰の後ろから近衛と神楽坂の声がする
その声に反応してか、絡繰は軽くジャンプするとマクダウェルの横に立った
「ではそろそろお暇させてもらおうか、フフ…」
そういって土埃の中に消えていった
「はぁ…はぁ…た、助かった…」

思わずそう言って地面に膝をつく
緊張が切れたせいか力が抜ける
「ア、アスナさん！このかさん！宮崎さんと長谷川さんを頼みます！僕はこれから事件の犯人を追いますので、心配ないですから先に帰っててください」
「ハァ?!ちょ、ちょっと待ちなさいよ!!相手は二人組だったでしょ!?一人で行っても――」
神楽坂が制止しようとするが、すでにものすごい速さでネギ先生は走り去っていってしまった
「ど、どうしよう…さすがに不味いわよねあれ…」
いつの間にか仲良くなっていたのか先生を心配する神楽坂
「…神楽坂、あたしは大丈夫だからネギ先生について行ってくれ」
「え？千雨ちゃん、本当に大丈夫？」
「ああ、転んでケガしたくらいだ、動けるし寮まで余裕だ…今はむしろ先生が心配だろ？」
「…うん、そうね。ごめんね千雨ちゃん！」
そう言って神楽坂もネギ先生の後を追って走り出した
「…ふうぅぅぅぅぅぅ」
一度大きく深呼吸をする
とりあえず山場は越えた
ネギ先生はちょっと心配だが、神楽坂がいれば多分大丈夫だろう
「なーなー千雨ちゃん？」
生きていることを実感していると、近衛が話しかけてくる
「ん？どうした近衛？」
「それがなー、本屋ちゃんうちらが来た時安心したんか…」
「きゅう」
「気ぃ失っとるんよ」
……
「…あたしが背負っていくから、近衛は荷物を頼む」
「分かったえ～」
とりあえず寮まで運ぶことにした

寮まで宮崎を運び、そのまま近衛に任せて部屋に戻る
「千雨ちゃんは大丈夫なん？」
と聞かれたがかすり傷程度だからと言っておいた
「はあぁぁぁぁぁ…」
盛大な溜息を吐いてベッドに倒れ込む
あー制服着替えないと皺になるなーでも着替える気力がないなーというかもう動きたくないなー
「……」
現実逃避して、この現状が変わるわけはないのに
「学校…行きたくねぇ…」
クラスメートに目をつけられると言う、考えられる中で最悪の事態
今まで一度もしたことのない『ズル休み』に携行しても仕方がないだろう
いやむしろ休む許可をもらってもいいくらいだ、これは正当な理由のある休みに違いない
「…さっさと寝よう」
どちらにしろもう動けないほどには疲れた
明日の朝もこんな感じだったら休むことにしよう、うん

「しっかりみたです？」
「もちろんですな」
「かぜのうわさにはきいておりました」
「あれほどはっきりとははじめてですが」
「かくにんかくにん」
「われわれきおくりょくがわるいので」
「にんげんさんはおつかれのようす」
「きょうのところはかくにんだけということで」
「じゅうぶんなしゅうかくでしたな」
「しかしおかしほどではないです？」
「おかしのほうがたのしいです？」

「なかなかみきわめがむずかしい」
「そうとおくないうちにわかるのでは?」
「えたいのしれないけんきゅうするです」
「おかしのあいまに」
「おかしのあいまに」

　気怠さが残る体を引きずりながら、あたしは中等部へ登校した
　あたしが入ってしばらくすると、神楽坂に腕を掴まれたネギ先生が入ってくる
　マクダウェルの席を見てほっとしたり、絡繰に話しかけられて飛び上がるほど驚いていた
　その後授業を始めたのだが、全く身に入っていないうえにため息を連発する始末
　気持ちがよく分かるだけに何も言えなかった
　だが突然パートナーがどうのと暗い顔して言われるとこのクラスは妙な勘繰りをする
　以前から外国の王子様とかいろいろなうわさが流れていたために、日本に来たのはやっぱりパートナーを探すためだったんだと盛り上がり始める
　それに合わせて暗い表情をしていた先生を慰めようと、寮の大浴場で元気づける会を開こうと話が飛躍した
　それを聞いたあたしは、そんな活力がなかったのでいつもと同じように自室に引きこもることにした
　そして自室に扉を開けようとしたとき
　扉と床の間に挟まれた一通の手紙に気が付いた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『親愛なる長谷川千雨様へ
　お茶会のお誘いをさせていただきます
　本日夜7時、森の中のログハウスでお待ちしております
　エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「…本人が書いたとは思えない文面だなこれ…」

現在の時刻は夜7時前
部屋に送られていた手紙に同封されていた地図を頼りに、あたしは森の中を進む
日が落ちて若干歩き辛いが、ある程度舗装された道なのでそこまで気にならない
そういう感じでしばらく歩くと、開けた土地にでる
丸太て組み立てられたログハウス
窓から明かりが零れている
その玄関先にはメイド服を着た人物が立っており、あたしの到着を待っていたようだ
「…こんばんは、絡繰」
「こんばんは長谷川さん、マスターがお待ちです」
『マスター』ねぇ…
ずいぶんと特殊な呼び名で
「じゃあお言葉に甘えて、失礼するよ」
「ではこちらへどうぞ」
絡繰の案内でログハウスに入る
中に入るといたるところにかわいらしいぬいぐるみが並べられている
人形だけではなく動物のものも並べられているあたり、この家の主の趣味らしい
「――来たか」
その家主はリビングのソファの上であたしのことを待っていた
「突然の招待、まずは謝ろう」
「あー、いや別に気にしてねーし」
「なに、礼儀の1つだ。そもそも来ないと思っていたからな」
行かなかったら行くまでしつこいことは分かってんだよ
最悪の状況を想定して、いくつか遺留物を持ってきてはいるがさて…

「あまり時間もない…さっそく始めようか」
「あぁ、んじゃお言葉に甘えて」
勧められるがまま家主――マクダウェルの向かい側のソファに座る
「今日はダージリンのいい茶葉が手に入ってな」
「ダージリンか…」
そうマクダウェルが言うと、絡繰がポットをもって来る
ほのかに香る独特の香り
時折自分で入れて飲むがこの香りは
「…春摘の新茶か」
「ああ、本場は夏摘が主流だが私はこちらも好きでな」
一口すると、なるほど確かに良い茶葉だ
それに淹れ方なんてあたしの数段は上だ
「――さて、本題に入ろうか」
今までの親しみを感じていた声色から一転
底冷えしそうな冷たい声で、マクダウェルはあたしに話しかけてくる
「お前はいったい何者だ？『長谷川千雨』」

だいななわならいいですな

先ほど変わらない表情で、あたしの目を見抜くような視線
カップを持つ手が震えそうなのをどうにか抑える
――ここに呼ばれたときから覚悟はしていたつもりだ
昨夜の段階ではまだ大丈夫だと楽観していた
だが、あの手紙が届いてあたしだけがここにいる
その時点でターゲットはあたしだけだと理解した
「……質問の意味が、よく分からないな」
その言葉ににやりと口を歪めるマクダウェル
「自覚があるのかないのか知らんが、お前はだいぶ目立つぞ…特にあのクラスではな」
「目立つ…？あたしがか…？」
「ああ、その様子だと気が付いていなかったようだが、な」
そんなあたしの様子が面白いのかより深く笑う
「あのクラスは少々…いやかなり特殊でな、面白いほどに騒がしいんだが――」
カップの紅茶を一口すすって心を落ち着かせる
そうだ、あのクラスはかなり特殊だ
クラスメートも他のクラスに比べて特徴的すぎる
そしてとどめに2年の3学期から来た１０歳の英語担任
そう――あからさまにおかしいのに
「誰もそれに、これといった違和感を覚えないのさ…あのクラスではな」
誰もあの状況に違和感を感じない
いや、もしかしたら感じていて口に出していないだけかもしれない
最初のころはそう考えることもあったが、クラスを観察していると
そんな考えは吹き飛んだ
あのクラスでそんなことを考えている人間は、いない
――たった一人を除いて
「だがお前は違うな？長谷川千雨…お前は、あのクラスに違和感を覚

えている――違うか？」
…もう紅茶を飲む余裕すらない
今まで考えないようにしてきた
あたしの認識のほうが、むしろおかしいと考えることもあった
だが、それを許容してしまえば
あたしは――

『嘘つき！』

「っ！」
思わず歯ぎしりをしてしまう
隠してきたつもりの本心が、目の前の同級生に暴かれそうになっている
そんなあたしの状況を、面白いおもちゃを見つけた子供のような表情で見つめるマクダウェル
「まぁ、そちらにも興味はあるが…私が興味を持っているのは、お前の秘密だ」
「…秘密？」
「お前の隠し事は、もう一つある…違うか？」
あたしの、もう一つの秘密…
まさか…
まさか、それも知られているのか…？
「……」
「回答は沈黙、か…心当たりがあると認識していいのか？」
…いや、まだだ
今の発言から、『何かを隠しているがそれが何かは判断できていない』ということだ
「…生憎と、何のことか分かんねぇな」
「ふん、案の定否定するか。賢明とは思えんが、まあいい」
楽しいお茶会とは程遠い空気になりながら、マクダウェルは紅茶をすする

「昨夜のことを坊やに話していないところを見るに、厄介ごとを避ける以外にもっと大事な隠し事があるのは分かるさ」
「…昨夜のこと、ね」
　隠そうともしない言い方に、やはり昨夜のあれは――
「それほどまでして隠し通そうとする秘密…なるほど、あいつの言う通りお前は確かに『怪しい』な」
「あいつ…？」
「ああ、お前の違和感を教えてくれた、親切な人間さ」
　絶対嘘だ、断言してもいい
　目の前のクラスメートに他人の隠し事をそれとなく伝えるとか、間違いなく善人のすることではない
（絶対だれか突き止めてやる…）
　さっきまでの負の感情を怨念に変えてでも探し出してやる
「……」
　ちらりとマクダウェルを見ると、視線をあたしからずらしていた
　視線の先には、おそらくだがあたしの後ろに立っている絡繰に向いている
「…ふん」
　すると面白くないといった感じで鼻を鳴らす
　なんなんだ一体
「クラスにいた時もそうだが、お前は『面白くない』な」
「わざわざ来てやったのにその言い草はどうなんだ、おい」
　失礼極まりないなこいつ
「だが俄然興味がわいた、お前のもう1つの秘密も見てみたくなった」
　なんだこの天上天下唯我独尊の塊みたいな思考回路は
「なに、神楽坂にも言ったが次の満月までは何もせんさ」
「…そうか」
　誰が信じるかそんな言葉
　というかなんでそこで神楽坂が出てくるんだ…
「今日はごちそうさんでした、じゃあそろそろ帰るからな」
「なんだ、もっといてもいいんだぞ？」

じゃあそのニヤ付いた顔をどうにかしろ
「お邪魔しました…」
「お気をつけてお帰りください長谷川さん」
玄関口まで見送りに来た絡繰に軽く会釈をして、あたしはログハウスを後にした

「…茶々丸」
「残念ですがマスターと長谷川さんの会話中に、ノイズは検出されませんでした」
「この程度脅威ととらえていないか、何かされてもどうにかできると判断したのか…」
先ほどのニヤ付いた表情から一変して、不機嫌になった少女は顔を歪ませる
「――忌々しい」
吐き捨てるようにそう呟いた
「目下の重要事項は坊やだ――が」
カップに残っていた紅茶を一気に煽る
――こんな感情になるのは15年振りか
「まさか久しぶりに人間相手に『苛立ち』を覚えるとは思わなかったぞ…長谷川千雨」
その閉じ切った心の奥底に、お前はどんな秘密を隠している
すべてに諦めを覚えたその顔の下に、何を隠している
苛立ちと同じほどに、1人の人間に『惹かれている』
それは見下されたことに腹を立てたからなのか
それとも――
「――らしくもない」
普段の自分なら唾棄すべき思考
目の前の最も重要な目的と並べるまでもないはずの、小さな目的
「それも含めて、見せてもらおうか…」

――お前のとっておきの秘密とやらを
紅茶の香りが仄かに残るリビング
幼さを残して少女は小さく嗤った

色々と思い出したくないお茶会から一夜明け、いつものようにあたしは中等部に登校した
ネギ先生もだいぶ落ち着いたのか、今日は真面目に授業をした
そして今日も今日とてマクダウェルは休みだった
一日がおわり、昨夜のお茶会を思い返しながら寮に向かう
(結局昨夜のあれは、あたしに釘を刺したかったのか?)
秘密を暴く、とは言っていたがただの好奇心でそういうことをするようなやつとは考えられなかった
おそらく別に目的がある
「あたしはそのついでってか」
まったくもってはた迷惑な話だ
「どうしたもんか…」
部屋に入りベッドに座り込む
次の満月の夜まで行動は起こさないと言ったが、全く信用できない
そもそも信じる要素が皆無なのに信じれるわけがない
「目的が不明瞭のため判断できませーん」
ばたりとベットに倒れ込む
このまま成り行きに任せるのは避けたい
だがあまり率先して動けば余計な関りを増やしてしまう
「…あれ使うしかねぇか」
ずいぶん昔に一度使ったきりでお蔵入りしていた遺留物を思い浮かべて引っ張り出す
「後片付けが面倒だから使いたくねぇんだよなこいつ…」
真っ白いＡ４サイズの紙を一枚引きながら、インク瓶のようなそれの蓋を取る

「スポイトかなんかつけてくれよまったく…よし」
インク瓶を傾けて紙の上に落としていく
赤いシミが紙の上に模様を作っていき――
「…うげ、よりによってその日かよ…」
ある日付を表した
『厄インク』
紙の上に垂らすと垂らした本人の一番近い厄日を教えてくれる
必ず垂らさないと効果がなく、万年筆等で書いても何も現れない
以前使おうとしたときに誤って床に落としてしまい、その結果床一面に赤々とあたしの厄日が…
それ以来万が一を考えるとなかなか使う気が起きなかった遺留物だ
「一週間切ってんじゃねーかよ、ったく何が『次の満月までは何もせん』だ、完全に嘘じゃねーか」
次の満月まで半月以上ある、あの言葉を信じていたら油断していたに違いない
その示した日付が――
「大停電の日、面倒だな」
5日後に迫った麻帆良大停電の日であった

翌日登校するとネギ先生が白い小動物と一緒にやってきていた
昨日一昨日と自分のことにかかりっきりだったのでよく分からないが、なんでも先生のペットだそうで
「学校に連れてきていいのか…？」
寮の方は許可を取ればペットも可なのだが、流石に学校に連れてくるのは…
「…ま、いっか」
なんかあってもあたしには関係ないだろうし
週末のおかし作りの買い出しに行かなくてはいけないんだ

「……」
「……」
だがまさか買い出しの途中にこいつと出会うとは思わなかったよ
「…2日ぶりだな、絡繰」
「はい、先日のお茶会以来ですね長谷川さん」
なぜか知らないが服が濡れて汚れている絡繰と遭遇
猫缶が入ったビニール袋を持っているようだ
「…お前なんでそんなに濡れてんだ?」
「先ほど川で流れていた猫を」
「オーケー大体わかった」
どうやら目の前のロボ子さんは、川流れしていた猫を助けるためにびしょ濡れになったらしい
「…妙なところで人間らしいっつーか、抜けているっつーか…」
「?」
若干首をかしげるな
「まぁ、風邪とかは引かねーだろうけど早めに帰って着替えておけよ」
「ご厚意感謝します」
妙にかたっ苦しい挨拶をして、絡繰は歩いていく
「…絡繰!」
そこそこの距離が開いたところで、絡繰を呼び止めるとこちらを振り向いた
「お前、結局マクダウェルとはどういう関係なんだ?」
同じ家に住み、メイド服で身の回りの世話をする
ロボットであることを加味しても、凡そ同級生同士とは思えない関係性
あの日からどうしてもそれが気になっていた
…まあ大体の予測はつくのだが
「…私とマスターの関係は、誤解のない最も正確な言葉で表すと〝主

従関係〟になるかと」
案の定想定していた通りの回答が返ってくる
そうだよなぁ、同級生っつったってロボットだし――
「人形（ドール）契約を結んでおります、名実ともに主従といって差し支えないかと」
……
いきなり専門用語を言われても詳しくないから分かんないなぁ
どうすんだよこれ聞き返すわけにもいかねーぞ
――かくなる上は仕方がない
「あー、そうなのか…色々と込み入ってるんだな」
あたしは誤魔化すことにした
「悪いな引き留めて」
「問題ありません」
そういって再び歩き出す絡繰
猫缶持っているということはどこかで猫に餌でもやるつもりなのだろう
「…ずいぶんと人間味のあふれることで」
相変わらずの非日常を噛み締めながら、残りのお菓子の材料購入に向かうことにした

「…ねえ、聞こえた？」
「な、なんとか…」
「うーむこいつは…」
長谷川千雨と絡繰茶々丸が立ち話をしていた場所から少し離れた建物の影に、２人と１匹が小声で話をしている
「千雨ちゃんって茶々丸さんと仲良かったのかしら？」
「でもこの前はエヴァンジェリンさんに襲われていましたし…」
先日の襲撃の際、長谷川千雨は宮崎のどかと一緒にあの場にいた
襲われる直前でどうにか間に合ったが、次の日以降特に何も言われ

なかったためそのままにしていたが――
「よくわかんないわね、普通襲われた相手と仲良く話なんてする？」
「少なくとも魔法の気はねーようだが、どうにも勘ぐっちまうぜ兄貴」
襲ってきた相手を気遣うような声かけ
数日前襲われたとは思えない関わり合い
もしかしたら、長谷川千雨はあちら側の――
『いやダメってわけじゃないですけど…』
そんな思考をしていた彼――ネギ・スプリングフィールドの脳内に、あの時の彼女の少し困ったような表情が浮かんでくる
楽しそうにお菓子を作り、自分の無茶なお願いも聞いてくれた
そんな彼女を思い浮かべていた
「…ううん、千雨さんは無関係だと思う」
首を横に振り、目の前の1人と1匹――神楽坂明日菜とアルベール・カモミールの言葉を否定する
「どうしてそう言えるのよ？」
「…勘、ですかね」
「勘ってあんたねぇ…」
「ま、まぁまぁ姐さん、確かに兄貴の言う通り何か打ち合わせをしていたわけでもねーし、とりあえず今はあいつを追いかけねーと！」
気が付いたらだいぶ先に進んでいた絡繰茶々丸に意識を向ける
「そ、そうね…とりあえず今は茶々丸さんの後を追うわよ」
「や、やっぱり追わないとダメですか？なんかさっきから凄い罪悪感が…」
「あーもういいっすから後を追うっすよ兄貴！」
カモミールの声で慌てて絡繰の後を追う2人
どうにも浮かない顔をして行くのであった

週末をはさんで訪れた月曜日
なぜか元気になったネギ先生だったが、マクダウェルが風邪で休む

と聞いたらすぐに出ていってしまった
気になるのは分かるが、せめて朝のホームルームまではしていってくれよ…あとその手に持ってる『果たし状』ってなんだ一体
結局あの後ホームルームなしで1日が始まった
いくら今日英語の授業がなかったからって、それでいいのか新任教師
そして、ついにこの日がやってきた
珍しく朝から居るマクダウェル
それにあたふたしながらも、安心した様子で授業を始めるネギ先生
そう――
今日は、大停電当日だ

だいはちわちっくに

「永かった」
夜の帳が下りた大樹の街
その一角にある西洋風の塔の上で、その女は呟いた
「15年間という月日は、私にとっては退屈すぎた」
金色の長髪と黒い外套を夜風に靡かせ
鋭い牙を覗かせた
「終わりにしようか…『ネギ・スプリングフィールド』」
長い夜が、始まろうとしていた

「茶々丸、予定通り私と合流しろ、大浴場にぼーやを誘い出すぞ」
『了解しましたマスター』
「チャチャゼロ、お前も手筈通りにな」
「ケケケケ、任セロ御主人」
新しい従者と、古株の従者を引き連れて
闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）がやってくる

順調だと、吸血鬼は思った
眷属として仕込んでいた佐々木まき絵は手筈通り、ネギ・スプリングフィールドに接触
女子寮の大浴場に来るように伝えた
あと少し
あと少しすればここに来る――
『…オイ、ゴ主人聞コエルカ？』
その時、別命を与えていた従者が話しかけてくる
「チャチャゼロか…首尾の方はどうだ」
『アア、ゴ主人ノ言ッテイタ通リ――』
あぁ、やはりそうか
面白いな、これだから吸血鬼は――
『部屋ハモヌケノ殻ダゼ』

やめられない
にやりと口端が歪む
獲物はイキがよく、そして賢い
「…分かった、チャチャゼロはそのまま奴を探せ、そう遠くへは――」
「エヴァンジェリンさん!!」
そうこうしているうちに、もう一人の獲物がやってくる
「さぁ、楽しもうじゃないか」
短い短い、夜の遊びを

「ゴ主人?オーイ?…無視シテイルナサテハ」
同じ女子寮の一室で、チャチャゼロと呼ばれた人形はいつものことだといった感じで愚痴る
「シッカシ、ナニモネェ部屋ダナココハ…マァゴ主人ノ家ニ物ガ多イダケカモシレネーガ」
整頓された部屋、きれいに並べられた本棚、ペン置き以外何も乗っていない机
モデルルームのような整理され過ぎたその場所は、違和感の塊でもあった
「ケケケ、ダガゴ丁寧ニ匂イハシッカリ残ッテイルゼ。闇ノ魔法使イノ従者チャチャゼロ様ニ掛カレバ、10分デ見ツケテヤルゼ」
懐からナイフを取り出し、チャチャゼロは部屋を後にした

「…匂いって、あたしそんなに匂ってるのか?」
「どうぐでかくにんしますですか?」
「ですがおそらくなにもでないかと」

「あのにんぎょうさんのいってた『におい』は、おそらくたいしゅうにはわからないものですゆえ」
「においだけに『たいしゅう』というわけですな」
「……」
「ぴーーーーー!」
「あぁくりすとふぁーがにんげんさんににぎにぎと」
「わらえないじょーくをいったのでしかたなし」
「これもさだめか…」
「いいから、続けるぞ…ったく」

「匂イガ途切レテルナ…コイツハ想像以上ニ手強イカモナ」
女子寮から少し離れた建物の陰で、チャチャゼロは呟いた
「前モッテゴ主人ガ動クコトヲ予想シテ、シカモ隠レルトハ」
焦りや怒りの表情はなく
いつもとおなじ様な笑みをして
それでいて彼女の主と同じように、面白いおもちゃを探す子どものような様だ
「時間ハ…アンマリネーナ、トットト探シ出シテヤルゼ」
そうして歩み始めた時
「…アン?ナンダコイツ」
普段の彼女ならば決して気にしないようなものが目についた
赤い風車が
「……」

夜風に小さく回る風車
時折向きを変えて羽を回す
（ナンダ…ドウミテモ普通ノ風車ナノニ…）
気が付けばその風車のすぐ来ていた
（罠、カ…？）
長年の勘がそう知らせる
こいつは何かある
するとそれまで小さく回っていた風車が彼女の方を向いた
「来ルカ…！」
ナイフを構え風車に飛び掛かろうとすると――

風車が猛回転を始めた

「…ハ？」
一瞬の呆けの後には
「――オオオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアア!!??」
強風に吹き飛ばされ、その場には空のかなたに飛んでいく彼女の声だけが残された

「…大丈夫なんだろうなあいつ」
「あんぜんせいにもんだいはないですので」
「さいだいそくどは６０きろですが、けがなしあんぜんがもっとーですゆえ」
「自動車並みの速さで吹っ飛んでる時点で安全も何もねぇだろ」

「ちゃくちじのそくどは、にんげんさんがあるくそくどいかになるようにはなっていますので」
「おくりさきもはんいないですのでしんぱいごむよう」
「…まぁそれならいいんだけどよ」

「逃げたか」
障壁が破られるとはな、とほくそ笑む
女子寮大浴場からこの橋まで誘い出された時は何をするつもりかと思ったが、拘束呪文を事前に仕込んでおくとはさすが奴の息子といったところだ
さすがに茶々丸がすぐ解除するという想定はなかったようだが
あと少しで念願が叶う、その直前にまたあいつが乱入してきた
桜通りの時も、茶々丸が奇襲された時も、そして今も
「じじいめ、同じ部屋にするから何かあるとは思っていたが…フフ」
受け止め損ね掠った傷から滴る血を拭き取る
「まあいい、遠くへは行ってないだろう」
あの坊やのことだ、ここから私をそのままにして逃げることはするまい
確信に近い考えを張り巡らせる
残された時間はそう長くない
停電が終わる前にケリを付けなければ
「――む」
その時、麻帆良大橋の柱の影が光り輝く
あの光は確か――
「仮契約(パクティオー)か」
茶々丸から坊やと奴が仮契約していたと聞いていたが

「来たか、坊や」

柱の陰から坊やと奴、そして肩に乗ったオコジョが出てくる

「なるほど、これで戦況は五分というわけだ坊や」

状況は若干悪くなった程度、まだこちらに分がある

「杖のない魔法使いと素人の従者、さてさてどこまで食い下がれるかな?」

にやりと笑ってみれば2人とも体に力が入る

「行くぞ、今だけは『先生』と『生徒』ということを忘れろ」

その言葉に隣にいる従者も臨戦態勢に入る

そしてそれは目の前に2人も同じだった

「楽しい夜だ、せいぜい本気で挑め」

決着をつける時が来た——

「……ん?」

——とはいかなかった

「マスター?」

隣の従者が怪訝そうに声を掛ける

それに魔女が答える前に

それは来た

「——アアアアアアアアアアアアアアアア!!??」

盛大な叫び声をあげて、主である魔女めがけてまっすぐと

「…ふんっ」

それを気にする様子もなく、彼女は飛んできたもう一人の従者を受け止める

——頭を鷲掴みにして

「オオオオ…オ?オオ、ゴ主人ジャネーカ。無事カ?」

「それは私の台詞だ」

若干ふらふらとしながらのんきにそんなことを言ってきた従者を呆れた様子で眺める魔女

突然の乱入者にもう一人の従者と目の前の二人と一匹は困惑していた

「その様子だと良いようにあしらわれたようだったな、どうだ?奴は

恨み言の1つでも言っていただろう」
「アーソノコトナンダガナゴ主人」
掴んでいた従者を下し思ったことを呟く主人だったが
「アイツヲ見ツケル前ニ吹キ飛バサレテコノ様ダゼ」
従者はそう返した
「……」
「アーゴ主人大丈夫カ?」
呆けた様子の主人に声を掛ける従者
その主人は――

「アッハハハハハハハ!!」

次の瞬間大声で笑いだした

「アハハハ!そうか!そうだな!あいつにとってはその程度のことだったか!アッハハハ!」
ひとしきり笑い、伏せていた顔を正面に戻す
「悪いな、少し取り乱した――仕切り直しと行こうか」
途端に背筋が凍るような感覚が2人と一匹を襲う
「本当はな坊や、お前の血を使ってこの忌々しい呪いをすぐにでも解いてやろうかと思っていたんだが――どうでもよくなった」
ほくそ笑みその横に従者2人が陣取った
「止めたければ、殺す気で来い先生」
月下の対決の決着は、もう暫し後に――

――15年間という時間は、私にとってとても長く、そしてひたすらに苦痛なものだった
来ると約束したアイツは死んだと伝えられた時、吸血鬼らしからぬ取り乱し方をしたのは思い返して呆れてしまう程のものだった
魔力を封じられ、自分では解呪することすら叶わず
ひたすらに中学生3年間を繰り返し続け、私の心は擦り切れ切ってしまった
唯一の希望すら失い、もはやこのまま永遠に同じ時間を繰り返す
――そう思っていたときに、『アイツ』と出会った
アイツの第一印象はその辺にいる女子中学生と全く同じものだった
特段変わった様子はなく、ごくごく普通の女子中学生
そのはずだった

初日から、アイツはその本性を見せた
茶々丸、神楽坂、近衛、桜咲、龍宮、超、長瀬、葉加瀬、レイニーデイ、そして私――
アイツは的確に私たちを警戒していた
それに気が付いていたのは、私と超程度だった
話したことはおろか顔すらまともに見ていない私の秘密を見抜いた
15年振りに、私の中の好奇心が疼いた
巧妙に隠していながら、その実本人が気付かないほどに警戒心をあらわにしていた
目立つ、正体がわからないから尚更に
話をして、さらにその思いは深まった

正直アイツの秘密とやらに興味はない
私のこの１５年間続く渇きを癒すだけの何かを持っているか
たったそれだけが、私の関心事だった
まるで恋焦がれる初恋のようなこの渇きを――

「負けた、か…」
ネギ・スプリングフィールドに抱かれながらエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは呟いた
たがいに出せる最大級の術式の衝突
そしてネギ・スプリングフィールドがうっかり発動させた武装解除呪文
予定より早かった停電復旧も加わり、彼女は再び封印状態に戻った
「…一応なぜ助けたか聞いてやる」
ニヤリと笑ってそう言えば、彼は笑って返す
「エヴァンジェリンさんは僕の生徒じゃないですか」
「…殺す気で来いと言ったんだがな」
１０歳にそれを求めるのは酷か、苦笑いに近い笑みをこぼす
「あーあ、計画は失敗、長谷川は見つからず、完敗だな」
「長谷川さん…？」
「あぁ、招待状の受け取りを拒否されてな。茶会に誘った時ついでに呼んでやればよかったな」
「…エヴァンジェリンさんは長谷川さんと仲がいいんですか？」
「…はっ、まさか。茶会も半ば強引に誘っただけだ」
橋の上に戻ると彼女は降りながら鼻で笑った
「１５年間私にそんな関係の人間はいなかったさ、これからもな」

従者からローブを受け取り、羽織ると彼女は歩く
自身の居城に向けて
「…今夜のことは借り1つだ坊や、それと今後はしっかり授業に出てやるさ」
「エヴァンジェリンさん…」
「エヴァちゃん…」
「お休み先生、それに神楽坂。風邪をひかんようにな、ククク」
そして振り返ることなく、麻帆良大橋を後にした

「ていでんおわったです?」
「いがいにはやくもどったなです」
「あちらもぶじにおさまったようで」
「これでひとあんしん」
「……」
「ではではみなさまかえりましょうか」
「あしたもがっこうですからにんげんさんもいそぎましょう」
「…あぁ」

大停電の日に何か仕掛けてくるとわかった段階で、あたしはいくつか遺留物を使って準備をした
誰が来てもいいように、そしてできるだけ怪我のないように（だいぶ甘い考えだったと我ながらに思うが）非殺傷の遺留物『閃風機』で撃退するというもの

『閃風機』
赤い風車型の遺留物、特定範囲に指定対象が入ると豪風を発生させて吹き飛ばす
指定対象は特定人物や「敵対している人物」のように範囲指定も可能
安全性は折り紙付きでかすり傷1つなく目標地点まで飛ばしてくれる

これを設置した後は学園の外まで『どこでも風呂敷』を使って移動し、停電終了まで『うおっちゃー』でマクダウェル達を観察することにした

『どこでも風呂敷』
くるむと任意の場所まで風呂敷ごと瞬間移動する遺留物、移動するにはしっかりと風呂敷を結ぶ必要がある

『うおっちゃー』
魚に見える形をした望遠鏡のような遺留物、少なくとも初めて見てこれを望遠鏡のようなものと認識できないだろう
なぜか見ている場所の音声も聞こえる

そして麻帆良大橋での一部始終を見た
――見てしまったというべきかもしれないが

『15年間私にそんな関係の人間はいなかったさ、これからもな』

「…んどくせぇ」
思わず言葉が零れる
結局あの我が儘吸血鬼はあたしに『アレ』を見せようとしただけだったのか
ほかに何かあったとしてもあの場に引きずりだされていれば、否応

なくそっち側に巻き込まれていただろう
ねじ曲がった根性、いやねじ曲がってしまった根性と言うべきか
――似たような境遇に憐れみを感じたか？長谷川千雨
――他人を気にかけるほどお前は善人じゃないだろう？
――ねじ曲がった者同士傷の舐め合いをしたいと感じたか？
「どれでもないさ、そうだろう？」
なんたって、お茶会のお礼がまだなんだからな

大停電から一夜明け、また新しい一日が始まる
昨晩英雄の息子と死闘を繰り広げた不死の吸血鬼にも同じように
いつもと変わらない朝が始まる
「…？」
従者――絡繰茶々丸がほぼ惰性となっている郵便ポストの確認を
したとき違和感を感じた
今まで――従者が主人に仕えて以来一度も何も入っていなかった
そこに一通の封筒が入っていたのだから

「……」
昨夜のことを思い出しながら、少々遅めの朝食をとる
今日もまた退屈な一日が始まる
これまで15年間繰り返されてきた退屈な一日が

あぁ、だがじじいに何か小言をもらうだろうか
事前に話を通してあったとは言え、昨夜は少々やりすぎた
それとアイツにも話をしておくべきか――
「ケケケ、アイツニハ裏ヲカカレタガ仕返シシナクテイイノカヨゴ主人」
棚の上にいるチャチャゼロがそう言ってくる
「そのつもりはないな…」
「ナンダツマンネェナ」
昨夜不燃焼で終わったからかそんなことを言ってくる
吹き飛ばされてきたチャチャゼロは、あの後茶々丸と神楽坂を相手にした
2対1という状況なのにチャチャゼロ達を足止めしていた
「素人相手に苦戦したのが悔しかったようだなチャチャゼロ？」
「否定ハシネェゼ」
ケケケと笑いながらチャチャゼロは誤魔化した

「…マスター、よろしいでしょうか」
そんな話をしていた私に茶々丸が話しかけてくる
「どうした茶々丸」
「郵便受けにマスター宛ての封筒が入っていました」
「…私宛て？」
私に手紙？いったい誰からだ？
「差出人は不明です、一応魔力反応はありません」
「ふむ…中身は？」
「板状のプラスチック製品と思われますマスター」
「そうか、分かったあずかろう」
そういって茶々丸から封筒を受け取る
表には『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル様へ』とだけ書かれており、裏面にも差出人などはない
糊付けされた封を開けて中を取り出す
「…何だこれは？」

出てきたのは１５㎝ほどの長さの二つ折りされたプラスチックの板
色は半透明で等間隔に目盛と数字が書かれている
「定規、か？」
「見たところ折り畳み式の定規のようですマスター」
封筒にはそれしかはいいていないようで、手紙の一枚も入っていない
「わざわざこんなもの封筒に入れてよこしてきたのか？とんだ暇人が――」
そういって閉じてあった部分をまっすぐに伸ばす

その時だった
「――っっっ!!!??」
全身を、いや身体の中を何かが通り抜ける感覚
全身に刻まれた忌々しい『あの術式』に触られているような感覚
巻かれていた鎖を引きちぎられていくような――

「マスター!!」
茶々丸が叫ぶのと同時に引き戻される
カチャンと音を立てて持っていた定規が床に落ちた
――なんだ？今のは一体…
「オ、オイゴ主人大丈夫…ウヲァ?!」
棚の上にいたチャチャゼロが大声を出すが、その直後大きな音がした
――動けないはずのチャチャゼロが棚の上から落ちていた
「姉さん?!」
「オーイテテ、結構痛カッタゼ…ッテオレ動ケテルゾ?!」
チャチャゼロと茶々丸が大騒ぎする
「…まさか、だが、一体…」
床に落ちたプラスチックの板を眺めて、私はらしくもなく呆然とし

ていた

「邪魔するぞじじい」
麻帆良学園女子中等部の中にある学園長室
そこに彼女――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは来ていた
「おぉエヴァかのぅ?よいぞ」
中から老齢な声が返ってくる
その返事を待ってエヴァンジェリンは部屋の中に入った
「お前さんの方から話がしたいとは珍しいのう」
「あぁ、急用ができたからな…察しは付いているんだろう?タカミチを呼んでいるくらいだ」
「ふぉっふぉっふぉ」
「あはは…」
顎髭をなでながら笑う少し風貌の変わった老人――麻帆良学園学園長『近衛近衛門』
その横で苦笑いをしている顎髭の男性――麻帆良学園中等部教師『高畑タカミチ』
この部屋にはエヴァンジェリンとその2人だけだった
「…単刀直入に聞こうかのぅエヴァ、何があった」
声を低くし、エヴァをのぞき込むように近衛門は聞きただす
「見ての通りさ…あの忌々しい呪いが元に戻った」
彼女がそう言うと部屋に静寂が訪れる
「…ではもう一つ聞こう、それはおぬしが自分でやったことかのぅ?」
「いや、生憎と原因不明だ…見当もつかないな」
「……」

「……」

机を挟んでエヴァンジェリンと近衛門がお互いを見やる

腹の探り合いをするかのように

「…と言っても分かったこともあるぞ」

「ほう？」

「さっき言った通りあくまでも『元に戻った』だけ…『登校地獄』そのものは健在さ」

「つまり、まだこの学園に縛られる…そういうことかなエヴァ？」

顔色をうかがいながらタカミチが確認する

「まぁそういうことだな…それが中学卒業までかそれ以上かは知らないが」

「…ふぉっふぉっふぉ、それだけ分かれば十分じゃのう」

エヴァンジェリンが部屋に入ってきた時と同じ微笑で近衛門が話す

「…いいのかじじい？」

「今すぐ分かることは少ないじゃろう、エヴァはいつも通りの生活をしてくれて構わんぞ」

「ふん…」

腹の探り合いは飽きたと言った様子で鼻を鳴らすと、そのまま何も言わずに学園長室から出ていった

「…よろしかったんですか学園長？」

「少なくとも嘘はついておらん、何かを隠してはおるがな」

手を組み肘を机について、今しがた吸血鬼の少女が出ていった扉を見つめる

「昨日の今日じゃ、何かがあった。それが何かまでは分からんがのぅ」

「学外の何者かが…？」

「その可能性は低い、そもそも手助けがあったからと言ってあれをどうこうできるとは思えん」

『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』

元は不登校の子どもを半ば強制的に登校させるために作られた呪

い

15年前、エヴァンジェリンとナギ・スプリングフィールド、通称『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』が戦い――そして吸血鬼が負けた

その時彼女にかけられた呪いがこれだった

――しかしそれは大きく歪んだ呪いとなって彼女を縛り付けた

強大な魔力を用いて中途半端な呪文を唱えた結果、彼女は15年間中学生生活に縛られた

「じゃがのぅタカミチ君、それだけでは説明できないことが一つあるんじゃ」

「…エヴァの魔力、ですね？」

「そうじゃ、おそらく登校地獄が学園結界に何らかの影響を与えておったんじゃろう」

登校地獄に魔力を抑える効果はない

しかしエヴァンジェリンの魔力は大きく抑えられていた

学園を包む巨大な結界通称『学園結界』

学園内での認識を阻害する結界ともう一つ、魔力を抑制する結界の二つで構成されている

後者の結界は強力で侵入者だけでなく学園側の魔法さえ抑圧される

しかしそれを加味しても、エヴァンジェリンの弱体化は異常だった

「それが正しい呪文になった、それによって――」

「魔力のほとんどが回復した、そう見て間違いないじゃろう」

雁字搦めに、そして出鱈目にかかっていた登校地獄の呪いが正しい形に、つまりただ登校を強制する呪いになった

それが意味することは――

『人形遣い（ドールマスター）』『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』『不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）』

御伽噺に出てくる災厄の魔女が現代に蘇った――

「調べる必要があるのぅ」

誰が、何の目的で彼女の呪いを元に戻したのか

学園の長としてそれを調べる必要がある
「エヴァからは何も聞けんじゃろうが、タカミチ君も探ってくれ」
「分かりました学園長」
英雄『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』の強力な呪いを元に戻す技量
「見極めなければならんのぅ」
老いてなおその眼光は鋭く、近衛近衛門は静かに動き出した

「ハァァァ…疲れた…」
女子寮大浴場終了直前の時間
――それがあたしの入浴時間だ
他の面子が入った後のこの時間はほとんどの場合誰も入っていない
大体はクラスごとや部活ごとに入っているため早い時間で入る生徒が多い
「まったくよぉ…ネギ先生はこっちを妙に気にするし、神楽坂は事あるごとに話しかけてくるし、面倒くせぇ…」

『千雨ちゃんちょっといい？』
『千雨ちゃんお願いがあるんだけど』
『千雨ちゃんこれからヒマ？』

以上回想
「あいつがいなかったのがせめてもの救いと言えるか…しかしなぁ、明日以降どうすっかなぁ」
「そんなに気になるなら登校しないというのも手だぞ？」
「いや流石にそれは…かえって目を付けられるだろ」
「そうか？案外名案だと思うがな？」

「それは最終手段だろ、どうしようもなくなった、とき、に…？」
　おかしいな、今大浴場に入っているのはあたしだけのはずなんだが
「あーっと…」
「どうした？奇妙なものを見るような目をして」
　いつの間にか今日欠席していた吸血鬼が入ってきてやがる
「あんた自分の家に風呂あるだろ確か、なんでこっち来てんだよ」
「知らなかったのか？時折こっちで入っているぞ」
　ニヤニヤして言ってくるあたり、今日に限って言えばわざとだなこいつ
「で？あたしに何か用なのか？」
「別に？言っただろう時折入ると」
「それ信じろって？」
「もちろん」
　ぬけぬけと言いやがる
「…単刀直入に言おう、長谷川千雨」
「あん？」
　神妙な顔してこっちを向くマクダウェル
「感謝している、言葉で尽くせないほどには」
「…さぁて、一体何の話やら」
　どうやら例の贈り物『正常規』の送り主だってバレてるらしい

『正常規』
　折り畳み定規の見た目をした遺留物、使用者のあらゆる状態異常を正常なものにできる
　あくまで正常に戻すだけで回復等には使えない
　ちなみに今回送ったのは一度使うと効果を失う『お試し版』だ
　マクダウェルが持っているのはもうただの定規だ
　…お茶会の礼にってあいつらが勧めてきたから渡したが、どうもうまくいったようだ
「安心しろ、こちら側で把握しているのは今のところ私だけだ」

「……」
「これは私なりのけじめ、借りが一つできたからな」
「心当たりがないんだが？」
「そういうことにしておいてやろう、私が勝手に借りを返すだけだ」
一方的にそう言うと浴槽から立ち上がり出ていく
「――気を付けろよ長谷川千雨」

こちらに関わるつもりがあるならな――

「……」
言いたいだけ言って帰っていきやがった
「気を付けろ、か」
関わる気はねぇ、というのはいつまで通じるんだろうな…

「上方修正の必要があるネ、それもかなりの」
大量のモニターに囲まれて少女――超鈴音は呟いた
「アーティファクト1つでエヴァンジェリンの呪いを正常に戻す、いやはや彼女をかなり低く見積もっていたネ」
モニターには昨夜のエヴァンジェリンとネギの戦闘記録と、様々な場所の様子が映し出されている
そしてその画面のいずれにも彼女は一切映し出されていない
「こちらの監視にまたく引かからないにもかかわらず間違いなく関わていた、どんな手を使たのカ」
魔力検知にもすべてのセンサーにも感知されていない
彼女の痕跡は一切ない
「見立て通り、彼女はワタシさえ手の届かない技術を持てるネ――」

――そんな君はワタシの敵カ？それとも味方カ？

「近いうちに見極めが必要かもしれないネ…長谷川サン？」

だいきゆうわのごようす

波乱万丈な吸血鬼事件は無事に幕を閉じた
新学期早々大惨事一歩手前だったが問題なかったから良しとしよう
そして麻帆良学園女子中等部3年生は目の前に迫った一大イベントで盛り上がっていた
それが――
「来週から僕たち3―Aは京都・奈良へ修学旅行へ行くそーで…もー準備は済みましたかー!?」
「「「はーーい♡」」」
――といった感じで修学旅行を一週間後に控えていた
この学園の修学旅行はとにかく早い
新学期始まって一か月も経たないうちから行く
5月の連休や夏休み期間、秋の行楽シーズンを避けてのことらしく、京都・奈良の他にハワイなども候補地に挙がっている
このクラスはネギ先生が外国出身ということもあり、委員長こと雪広がクラスを取りまとめて決定した
まあクラスのほとんどがネギ先生支持である上に、京都・奈良の方が安心といった意見が多かったので意外とすんなり決まりはしたが
とにかく、来週の火曜日から4泊5日の日程であたしたちのクラスは京都・奈良への修学旅行が決定した

この修学旅行は何かが起きる
直感に近いそれをひしひしと感じながら約一週間を過ごし、気が付けばあっという間に修学旅行当日となっていた
初日は大宮駅に直接集合しそこから新幹線で京都へ向かうスケ

ジュールだ
　というわけで早くもなく遅くもなく大宮駅に着いて、そのまま新幹線に乗り込んだ
　旅行につきものの『マイ枕持参組』はまだいいんだが、セイロに肉まん詰めて車内販売ってそれいいのか？
　特に何か言われていない様だからいいとして、商売根性逞しいなぁ
　今回の修学旅行であたしは3班に振り分けられた
　同じ班に朝倉・那波・雪広・村上と若干2名に不安しか感じない構成となった
（雪広はともかくとして朝倉が厄介だなこりゃ）
　あいつのことだ、修学旅行中も碌でもないことやるに決まっている
（いやーはじめてのりょこうですなー）
（きょうととやらにはなにかおいしいものあるです？）
（そうだな…宇治抹茶のお菓子なんかは旨いって聞くが、それと八つ橋だな）
（きいただけでおいしそうなおかしもりだくさんのよかん…）
（これはきたいをふくらませるべきでしょう）
　そういえばこいつら連れての外出初めてだな
　いやな予感はするが人生初の新幹線、のんびり堪能するとしよう

…分かっていた、あぁ分かってはいたさ
　何事もなく京都に着きますようになんて願ったところで、それが必ずかなう訳はないって事ぐらい
「だからってこれはないだろう…」
　周りを見渡すとあちらこちらからゲコゲコゲコゲコ…

お菓子の箱を開ければゲコゲコ
弁当箱を開ければゲコゲコ
水筒を開ければゲコゲコ
そこら中ゲコゲコ鳴くカエルまみれになっていた
これがもう見た目以上の大惨事
引率の源しずな先生と保健委員の和泉は失神するわ、古菲はビニール袋にカエル１０８匹詰め込むわでてんてこ舞い
ネギ先生は突然前方車両に向けて走り出す始末で収拾がつかない
とりあえずあたしは近くに来たカエルを通路にポイポイッと放り投げて事を凌ぐ
とんでもない出だしになった修学旅行に、あぁ京都についてもこんな感じなのかとさっそくあたしの心に暗雲が立ち込め始めた

『京都（きょうと、みやこ、きょうのみやこ、英： Ｋｙｏｔｏ）は、日本の都市の１つである
都、もしくは京ともいい、歴史的には７９４年に日本の首都に定められた都城・平安京で、当時は日本の政治・文化の中心地であった』（ｂｙ Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）
…とあるようにこの街の歴史は１２００年以上にわたっている
その長い歴史の中で失われた文化財は数知れず、いまだに形を残している物たちだけが過去を紡ぐ
京都と聞いて真っ先に思い浮かぶ観光名所と言ったら清水寺ではなかろうか
巨大なせり出した『舞台』は国宝に指定されており、かつてはここで能や踊りを披露していたそうだ
「有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで…』の言葉どおり、江戸時代実際に２３４件もの飛び降り事件が記録されていますが生存

率は８５％と意外に高く…」
すらすらとカンペもなしに清水寺の概要を説明する綾瀬に、周りからは驚きの声が上がる
綾瀬はああいうことは得意なのに何でバカブラックの称号に甘んじてるんだほんと
さて清水寺と言えば『地主神社』と『音羽の滝』も有名だろう
地主神社はかなり有名な縁結びの神社、恋占いの石に階段手前から目をつぶって到達すると恋が成就する
そして音羽の滝は3筋の水が流れる滝でそれぞれ『健康』『学業』『縁結び』が成就するという
なんて話を聞いてうちのクラスが黙っているわけもなく
早速地主神社に移動したのだが
（カエルの次は落とし穴って小学生のいたずらかよ）
恋占いの石目前で落とし穴に落ち引き上げられている雪広と佐々木を見ながらそう思った
何か起こるとは言ったがこんな子供っぽいものとは思わなかったぞ
ちゃっかり後ろでは宮崎が目をつぶったままゴールしてるし
とどめに音羽の滝での大騒動
どこの誰か知らないが滝の上にご丁寧に焼酎の樽を設置していたらしく、縁結び成就の為我先にと飲んだクラスメート全員がダウンする事態に
ネギ先生と神楽坂が必死に誤魔化しているが、これほぼ事故なんだから正直に言ったほうが良くないか？
むしろ再発防止の観点から見ても報告は必須なんじゃ…
とはいっても修学旅行が中止になる可能性も確かにあるのでとやかく言うことはやめた
それとそこで味見している吸血鬼、気が付いてないと思ったら大間違いだからな
お前も呑むかだって？あたしはまだ未成年だ

――風呂場が騒がしい
部屋でのんびりしているのももったいないからと、消灯時間まで暇つぶしでもと思った矢先にこれである
なんかが切れて水に落ちる音
これ完全に厄介ごとだよな？よし大人しく部屋に戻ろう
「ひゃあああああーーーーっ！」
…悲鳴が聞こえるのはちょっと想定外だな
どうするか…ネギ先生か誰か呼ぶべきか？と思って聞き耳立てていると、女湯から喧噪が消えていった
と思ったら今度は大慌てで誰かが脱衣場に入ってきた
「あ、やっべ」
慌てて近くの自販機の陰に身を隠す
直後に脱衣場から刀を携えた桜咲が、私に気が付くことなくそのまま駆け抜けていった
「…何だったんだ一体、もう部屋に戻るか」
風呂を確認してみたい気持ちもあるが、触らぬ神に祟りなしで部屋に退散することにする

（…にんげんさんにんげんさん）
（…んだよ、朝にははえーぞ）
（おさるさんにだれかがつれてゆかれまする～）
（…は？）

布団で寝ていたあたしをそう言って起こしてくる
なんとも物騒なこと言っているが

（うぉっちゃーつかえばばっちりまるみえてきな？）
（めっきりしっかりくっきりばっちりてきな～）
（わーったわーった、見りゃいいんだろ見りゃ）

枕元に置いてある小物入れからこっそり『うぉっちゃー』を取り出してのぞき込む
そして見えてきたのは――
（…巨大なサルとクマの着ぐるみ？）
着ぐるみチックな動物が2体、そしてそれぞれに斬り掛かっている身知った顔が2人
（神楽坂と桜咲じゃねーか、つーことは…）
少しずらすと眼鏡をかけた長髪の女が、これまた見知った顔のクラスメートを担ぎ上げているところだった
（あれは、近衛か！連れ去られたのはあいつだったのか！）
そう思ってみていると動きがあった
神楽坂と桜咲の攻撃は着ぐるみ？に受け止められていたが、神楽坂が持っていたハリセンに力を込めると――
（待て待て待て待て?!ハリセン使って攻撃してんのかよあいつ!?）
――等身大のハリセンに力を込めると、受け止めていたサルが煙のように消えた
そのまま桜咲に近衛を助けるように言い、もう一体のクマの着ぐるみ？に向かう
桜咲は長髪の女に斬り掛かり――突然出てきた別の剣士を弾き飛ばした
『どうも～神鳴流です～おはつに～』
どうにも気の抜けた声で立ち上がる、なんとも剣士っぽくない格好をした少女
名を『月詠』と言うそうだ

その見た目とは裏腹に、桜咲との斬り合いはほぼ互角
このままでは長髪の女に近づけない
(状況が悪いか?このままだと近衛が…!)
クマと戦っていた神楽坂は小さなサルに取り囲まれており抜け出せない
だがこの場にはもう一人、戦える人間がいた
『――テル・マ・スキル・マギステル』
ネギ先生が何やら唱えると光の矢のようなものが長髪の女に飛んでいく
『あひぃっ、お助けー!』
しかしその女は近衛を盾にしたのだ
当然ネギ先生は近衛にけがを負わせるわけにはいかないので、光の矢を別方向に飛ばす
人質がいる限り長髪の女に攻撃を当てるのは至難の業だろう
そのまま立ち去ってしまえばその女の勝利だ
――勝利だったんだけどなぁ
(桜咲はともかく神楽坂がそんな挑発されて我慢できるわけないだろ…)
形勢有利と見るやこの女、近衛の口をきけなくするとか操り人形にするとか言い出し、とどめに近衛でお尻ペンペンなんてするもんだからキレた2人とネギ先生の攻撃であっさり無力化された
人間怒らせると何しでかすか分からない、肝に銘じておこう
ついでにやられていた剣士と一緒に巨大なサルのぬいぐるみで空を飛んでいく女
どうやら今日は手を引くようだ
(一時はどうなるかと思っていたが…)
波乱万丈すぎる修学旅行初日の最後の締めくくりとしては少々荒々しかったが何事もなく終わった――
はずだった
ぞわり、と背筋を何かが通り抜ける

誰かに見られている
布団の中にいる以上、直接あたしを見る方法は限られる
まさか――
そんなわけが――

『うぉっちゃー』を通して見る景色
今しがた飛び去った巨大なサルのぬいぐるみ
そのしっぽにしがみついている剣士
こちらを、寸分違わず見抜いていた
『　　』
口元が動き、先ほど戦闘中に見せていたどこか抜けた表情とは似つかない妖しげな表情で『何か』を呟いた
聞こえなかったはずだ、間違いなく聞こえなかった
剣士は何もしゃべらなかった
しゃべらずに口だけ動かしていた
なのに
なのになんで

それが聞こえたような気がしたんだ？

今回ウチが引き受けたんは護衛の仕事
なんでも東京の方から来た呪術協会の姫様を攫う手伝いをするらしく、相手方に神鳴流の先輩さんがおる聞いてとても張り切っとりました
ちょっと遅刻してしもうたけど、打ち合ってみて確かにお強い方でしたわ

相性の悪いウチの二刀についていけるだけでも大したもの言うのに、久しぶりにええ方とお手合わせできました

――せやけど、ウチはそれ以上に興味惹かれることに気が付いてしまったんですわ

千草はんは気ぃついてなかったみたいやけど、あの場に着いてからウチは妙な違和感を覚えとりました

誰かにじっと見られているような、そんな違和感を

せやけどあの場にはうちら以外のだーれもおりませんでした

ただの勘違いかとも思いましたが――時間が経つにつれ、それは確信に変わりました

剣士の勘、言うもんでしょうか？理論付けできないですけど、あれは気のせいでもなんでもありませんでした

目通しの場所まではあたりを付けられましたが、誰がどこから見ているのかまでは見つけられませんでしたわ

――先輩との斬り合い以上に、ウチの中の好奇心がうごめきましたわ

せやからそん人に向けて言ってやったんですわ

『高みの見物とはええ御身分ですなぁ？』って

ちょーっと意地悪しましたが、きっとそう遠くない場所からうちらのこと見てはったんでしょうな

「いつかお会いできるとええですな？」

今回の仕事、引き受けて正解だったみたいですわ千草さん

だいじゅうわでしたか？

一夜明けて修学旅行2日目
麻帆良学園女子中等部3――Aは宿泊している旅館で朝食を摂っていた
「うー昨日の清水寺の滝からの記憶がありませんわ」
若干疲れた表情で朝食を摂るのはこの暴走クラス最高のストッパーにしてショタコ…失礼、子ども好きの委員長『雪広あやか』
昨日清水寺の音羽の滝で不幸にもお酒を飲んでしまい、1日の半分ほどをつぶしてしまった被害者の1人である
「せっかく旅行の初日の夜だったのにくやしーっ」
その隣で悔しそうに話すのは父親が麻帆良学園で教師をしている『明石裕奈』
彼女もまた何者かによって仕組まれた非道（）な罠の犠牲者である
「今日こそはネギ先生と一緒に――と言いたいところなんですが…」
「あー…うん、言いたいことなんとなく分かる、かな…」
ちらりと2人が目を見やると
「……」
目の下に隈を作り、なんとも弱々しい手つきで食事をするクラスメート『長谷川千雨』がいた
「は、長谷川さん？何と言いますかその…あまり気分が優れない様子ですが…」
「…あぁ委員長か、大丈夫ただの寝不足だよ」
「いや無理があるでしょそれは?!」
微妙に身体を前後させ、なんとも不気味な彼女の様子に周りのクラスメートたちも声を掛けてよいのかどうか悩んでいた
「朝食食べれば元に戻るから…今日の班別行動には問題なく参加できる…心配しないでくれ」
「いえ…まぁ、あまり無理をなされないように…」
本人が大丈夫と言っても全く信用できない様子であり、さしもの委員長も困惑せざるを得なかった

結局あの後一睡もできずに夜を明かした
あの西洋風剣士余計なことしてきやがって
幸いあの後旅館に襲撃はなかったからよかったものの、委員長たちに心配かけちまった
今日はいよいよ修学旅行のメインイベントの１つ『班別行動』だ
奈良公園を中心として自由に散策するが…あの委員長のことだ、ネギ先生たちと一緒に行動するとか言い出しそうではある
とはいってもほとんどの班が奈良公園に立ち寄るのだから、問題ないと思うが
なんだかんだ言って人生初の奈良観光だ
せめて今日くらいは平穏無事に終わってほしい

出発までにネギ先生がクラスメートにお誘いを受ける以外特に変わったこともなく、あたしたちは無事に奈良公園へと到着した
テレビや旅行雑誌に載っていた鹿の群れと、非常にうれしくないクラスメートが出迎えてくれた
「ここに来るのも随分久しぶりだ、アイツを追ってこの国に来た時以来だから…１６年振りか」
「へーそうなんだな何を言ってるのかよく分かんねーけどよかったなありがとうお前の班はあっちだろうがなんであたしのとこに来るんだよ!!」
「ここに鹿がいるからだが？」

いけしゃあしゃあと言いやがって…！
「実際ここにたくさん集まっているんだから仕方ないだろうが、ほーら食え食え」
「あっちにだっているだろうが、態々横に来てんじゃねぇよ」
「つれないなぁ、クラスメートとの親睦を深めようと思ってきているというのに」
「あたし以外のクラスメートとまともに話してねぇじゃねぇかよ！」
先日の大停電の日以来ほとんど接触していなかったマクダウェルの奴は、この修学旅行中はやたらとあたしに接触してくる
幸いほとんどのクラスメートはネギ先生のところに集まっているので、ここにはあたしとマクダウェル、そして絡繰しかいない
「ケケケ、ソウ言ウオ前ダッテ他ノ奴ト殆ド話シテネェミタイダガナ？」
…絡繰が抱えているカバンから、見覚えのある人形が話しかけてきているような気がするが気のせいだ、うん
「コノ前ハ不戦敗ダッタカラナ、ソノウチリベンジサセテモラウゼ」
「だそうだ、よかったなチャチャゼロに気に入られたぞ」
こいつら…
「あぁそうそう、一つ言っておかなければならんことがあってな」
「…何だよ一体」
「あしたの班行動、ぼーや達と一緒にすることにしたのでな」
「いやだからそういうことをあたしに言うなと――」
「大きく動くぞ、明日間違いなく」
ピシャリとそう言い放つマクダウェル
「お前も、無関係ではいられなくなるかもしれん…それだけは覚悟しておけ」
「…なんでだよ」
「前にも言ったがな、お前は目立つんだよ」
「それが分かんねぇっつーの」
まあ気を付けろよと持っていた鹿せんべいをあたしに押しつけてきた

「ちょ…」
「残りのせんべいは任せる、じゃあな」
「おま、今渡されると…あ、こら寄ってくるんじゃねぇぇぇぇぇぇ!!!」
のわあああああぁぁぁぁぁぁあたししかせんべい持ってねぇから周りの鹿全部寄ってきやがる!!あっちいけぇ!!

「ひ、酷い目にあったぜ…」
あの後持っていた鹿せんべい全部食べられるまで鹿に群がられ、悪い意味で忘れられない思い出ができた
「いつか仕返ししてやる…」
沸々と復讐を心に誓い旅館に戻ってくると、ロビーでネギ先生が頭を抱えたり四つん這いになったり床を転がったりと奇妙なことをしていた
どうやらほかのクラスメートも気になったようで声を掛けたんだが…
「告白…告白ねぇ」
動揺してはいたが聞いた限り誰かに告白されたらしい
誰にされたかは言わなかったが、まあここで出てきてしまったのが「学園報道部突撃班にして3—A公式カメラマン朝倉和美にお任せあれ!!スクープあらば即参上!」
知ってた
…心の中でこっそり「出歯亀パパラッチ」と呼んでいることは秘密にしておこう
つっても今のネギ先生に告白しそうなの、今朝勇気を振り絞って班別行動のお誘いしていたあいつ位なもんじゃね？
むしろ他に該当者が思い浮かばないんだが
というわけで朝倉は取材に向かっていった

…なぜかその後ネギ先生と一緒に風呂入っていたとかでクラスメートの鉄拳制裁食らっていたが
「何やってんだあいつ…」
碌でもないこと企んでいたのか知らんが、心の底からどうでもいいことには違いない
今日は疲れた、早いとこ休むことにしよう――

「――ではゲーム開始!!」
それがどうしてこうなった

状況を整理しよう
昨夜と打って変わって大騒ぎしてしまった3―Aクラス
案の定引率で来ていた学園広域生活指導員の新田先生に注意を受ける
そして朝まで各班の部屋からの退出禁止令が下り
突然朝倉が言い出した「くちびる争奪!!修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦♡」に委員長のパートナーとして駆り出された
うん、全く意味が分からん
おかしいな?部屋からの退出禁止令が出ているのにな?
つーか委員長が率先して禁止事項に参加すんじゃねーよ…
ルール説明?真面目に取り組む気無いから話半分で聞き流したが?
枕で相手をノックアウトしろって言うのだけは分かった
…まあどうにも唯々ゲームで盛り上がろうっていう魂胆ではなさそうだが
さて肝心の参加者なんだが
1班代表：鳴滝風香　鳴滝史伽

２班代表：古菲　　長瀬楓
３班代表：雪広あやか　長谷川千雨
４班代表：明石裕奈　　佐々木まき絵
５班代表：綾瀬夕映　　宮崎のどか
６班代表：不参加
…まぁ…なんだ…
これもう2班の優勝でいいんじゃねーの？

（にんげんさんふぁいとですぞ）
（しかしごうかけいひんとはいったいなんでしょうな？）
（おかしですととてもはっぴー）
（断言するがお菓子ではねーぞ）
（それはざんねんです…）
あの朝倉がお菓子で釣るなんて考えられねぇからな
というかマクダウェル達の班不参加だし
「そういうところはちゃっかりしてるよなぁあいつら…」
「千雨さん！もうゲームは始まってますわよ！しっかり周りを注意してくださいまし！」
「へーへー・・・」
委員長はもうネギ先生とキスすることしか頭にねーみたいだし
目的地はネギ先生のいる教員部屋
他の班の代表も間違いなく教員部屋に向かうだろう
…行き方に違いはあれど
猛烈に帰りたいと思いながら、どこか隙を見て抜け出す決意をしていると
廊下の曲がり角で４班代表に遭遇した
「――っ！いいんちょ!?」
「まき絵さん、勝負ですわっ!!」
早速戦闘を開始する委員長と佐々木の２人
初撃はお互いいい感じに顔面にあたり相打ち
そのまま後ろで待機していた明石が委員長にとどめを刺そうとし

たので足を引っかけて転ばせておく
（ま、参加した以上最低限は働くけどな）
そんな風に考えていたら階段の方から何やら足音が
見てみると優勝候補の2班代表古菲がこちらに向かってきていた
両手と左足、そして口に枕を咥えて
「あっぶねぇ!!」
ギリギリで避けはしたが委員長と明石が枕の餌食になる
そのまま三つ巴の乱戦を始め、手出しができなくなる
「あーあ、どうすんだよこれ」
「いやはや、古はああなると周りが見えなくなるでござるからな」
だったらどうにかしろ似非忍者
「…ん？」
どったんばったん大騒ぎをしていると、奥の方から足音が聞こえる
「おーっと新田先生のお出ましかなこりゃ」
「え、ほんと？」
「逃げますわよ皆さん！」
蜘蛛の子を散らすように逃げていくが、古菲が逃げる時跳び箱の要領で明石を踏み台にしてしまい第一犠牲者となってしまった
そしていい感じに委員長たちとはぐれたので離脱を決意
すまないな委員長、だが必要最低限度の仕事はこなしたぜ

…どうやら今日はあたしにとっての厄日だったようだ
新田先生の監視網を抜けて自室に戻る
修正の必要もないほど完璧な計画だったのに
なのに…なのに…
「千雨さん…」
「あー…」

もうちょっとで帰り着くって時に廊下でばったりと出会ってしまった
「キスしても…いいですか？」
…見る奴が見れば大層ロマンチックなシチュエーションだ
ロマンチックすぎて狂喜乱舞するくらいには
「…まあそういう小説を読んだこともあるにはあるけどなぁ」
一体全体どうしてこうなったのかさっぱりわからねぇが
「ま、やることは１つってな」
そのまま先生の前に行き――
「千雨さ――」
「そういうのは、１０年早いぜ先生？」
右手に持っていた枕で思いっきりはたき倒してやった
「って言ってもあたしとそんなに変わんねーんだけどな」
倒れたネギ先生擬きが何かを言って爆発する

『ちさめちゃん！』

「――あたしもいつか、また誰かを信じることができるようになれるかな」

小さくそう呟いて、今度こそ自室へと向かって歩き始める
夜はまだ更け始めたばかり――

結果から言おう、あたしは幸い新田先生につかまらずに済んだ
あれ以外にもネギ先生擬きが５人現れていたようで、他の参加メンバーとの間で色々とあったらしい

そして最終的に勝者なし――かと思ったら最後の最後に大どんでん返し、と言う程ではないが宮崎が見事キスをして単独優勝
――まあそのあとネギ先生と今回の主犯朝倉と一緒に朝まで正座コース強制参加となったわけだが
さすがに新田先生もそこまで鬼ではなかったようで、日付が変わって1時を回る前頃には全員を部屋に帰していた
朝まで正座させていると翌日の自由行動に響くと判断したのだろう
鬼にも血と涙は流れていたって感じか
「さて、今日は自由行動だが…」
委員長たちはシネマ村に行きたいとか言っていたな
「つーことは京都散策が中心か…うーん」
あたしだって京都は初めてなんだ、色々と見て回りたい
「しかしシネマ村によるとなると結構時間食うよなぁ…行きたいところ絞ってぇ?!」
強烈な頭部への痛みと視界に散りばめられる光に思考が中断する
「いっっっ……てぇぇぇぇ……」
何かに頭をぶつけてしまったらしい
「あ、あうう…お、お星さまが見えますぅ…」
「おおおぉぉぉ…そ、その声は宮崎か…すまん前をよく見ていなかった」
壁際に立っていた宮崎に気が付かずぶつかっちまったらしい
「は、長谷川さん…い、いえ…私も不注意でした」
「大丈夫か、怪我してねぇか?」
「だ、だいじょうぶです」
お互い頭を押さえながら話す
「本当に悪かった宮崎…ん?何持ってるんだそれ?」
「え?!えぇっとそのぉ何と言うか…」
なんだか非常に歯切れが悪い
「あ、悪いちょっと気になっただけだ、無理して答えなくていい」
「は、はい」

とか言ってると反対側から綾瀬がやってくるのが見える
「ほんと悪かったじゃあな」
「あっ…」
「どうしたのですかのどか」
「あっ夕映…」
後ろから聞こえてくる話に耳を傾けず、あたしは委員長たちの下へと急いだ

――ああ、そうだ
この時、気が付いていればよかったんだ
大事な大事な落とし物に――

「ほんがすきなにんげんさんです?」
「え…?」

だいじゅういちわにより

京都の一角に巨大な鳥居を讃える神社『炫毘古社(かがびこのやしろ)』
石段を少し行くと赤い鳥居の列が参列者を出迎えてくれる
しかし今日はその鳥居には『立入禁止』の看板が置かれていた
「あれー立ち入り禁止…他を探さないと…」
そんな場所に埼玉麻帆良学園から修学旅行で来ていた少女――宮崎のどかがいた
修学旅行3日目の自由行動、彼女は嵐山・嵯峨野まで自身の班と担任『ネギ・スプリングフィールド』と行動していた
その途中ネギと神楽坂明日菜の2人がどこかへ向かうのを見て、そのあとをついてきたのだ
そして今立ち入り禁止の看板を見て別の場所に向かおうとしていた
(助けてーっ)
「…?ネギ先生…?」
かすかに担任の声が聞こえた気がして辺りを見渡すがどこにもいない
すると手に持っていた本が仄かに光る
その本を開くと――
(また…これって…ネギ先生の今の気持ちー…?た…た、大変っ…)
ネギと明日菜の2人が助けを求めている絵と文字が現れていた
それを見たのどかは大急ぎで鳥居をくぐり、ネギと明日菜の下へと向かった

しばらく走り続けるが行けども行けどもネギたちに追いつかないのどか

（どうしよう、どうしよう…ネギ先生（とアスナさん）が困って助けを求めています）
明日菜をついでみたいに扱いながら道を急ぐ
「でもあの二人はどこに…そ、そうだまたこの本で」
抱えていた本を再び使う
「名前を呼べば今のネギ先生の気持ちが…ネ、ネギ先生…」

すると本は新しい絵と文字を浮かび上がらせ――
（あああ!?何だかスゴイのが出てきてさらに大変なコトに――!?）
巨大なクモを操る少年に襲われている場面だった

のどかはさらに本を読み進めていく
ネギは少年を、明日菜は巨大グモを相手取り戦い始める
明日菜はクモをワンパンで行動不能にしハリセン（のような何か）でクモを斬りつける
するとクモは煙のように消えてしまう
２対１、状況は有利になったかと思われたが――
「ああっ、ネ…ネギ先生が――っ」
なんと少年の攻撃でピンチに追い込まれてしまう、読み進めているのどかも涙目になる
――問題があるとすれば、肝心のネギたちがすぐ後ろで戦っているのに気が付かず読書に耽っているところだろうか

『いやいくら何でも音とかで気が付くだろ普通ｂｙ千雨』

そう思っているかは定かではないが彼女の言葉が届くはずもなくのどかは本の内容に没頭している
「そこっ!あっ惜しい、止められちゃった…ネギ先生後ろっ後ろです――っ…え?」
ようやく気が付くが肝心のネギたちは劣勢を悟り、直後どこかへ逃げてしまった

「ああよかった…逃げれたみたい…」

本を開きながらのどかもネギたちを探す

するとネギの考えていることが浮かんでくる、どうやらあの少年に勝つ算段が付いたようだ

「ええっ…!あの強い男の子に勝つ勝算が…!?スゴイ…ああ続きが気になります――」

何の目的でここまで来たのか忘れていろうなのどかの背後で物音がする

のどかは慌てて本を仕舞う、その直後――

「見っけたで――っ…ってあら――??」

――犬のような耳の生えた少年がのどか目掛けて突っ込んできた

なぜかスカートの中に――

すったもんだしたが少年はのどかとこの直前にゲームセンターで出会ったことを覚えていた

素直に謝る少年に若干困惑したのどかだが、少年の「今この辺でケンカ中やねん」「あとでワナ解いてこっそりお姉ちゃんだけ出したるわ」というセリフからこの少年がネギと戦っていた相手だということに気が付く

千載一遇のチャンス、のどかはカードから出てきた本の力を使うためにある策を思いつく

「あのっ…私…私…宮崎のどかです。あなたのお名前は…?」

「小太郎や、犬上小太郎!」

少年は笑顔でそう答えた

「や、やったーネギ！」
それは一瞬の事だった
少年――犬上小太郎の攻撃に為すすべもなくボロボロになっていたネギはカウンターとして白　き　雷（フルグラティオー・アルビカンス）を撃ち込み辛くも勝利したのどかの見た勝機とはこのことだったのだ
あとはここから脱出するだけ――そのはずだった
「――だが…まだや、まだ終わらへんで!!」
小太郎の体が突如獣のように毛で覆われ始め、手足も犬のそれへと変化する
獣化――それが小太郎の切り札だった
ネギは再び小太郎を迎え撃とうとするがその直後小太郎の姿が消える
あまりの高速移動に目で追えなくなってしまったネギ、直感で右からくると思ったその時――
「左です先生――!!」
咄嗟にその声――追い付いたのどかの声に合わせて左からくる小太郎の迎撃に成功する
その後ものどかのアーティファクトのおかげで攻撃をかわしていくネギ、しかし――
「やべぇ、兄貴のダメージが大きすぎる！このまま張り合うのは危険だぜ！」
先の戦いで重症を負っていたネギにこれ以上の戦いは無理だった
「あのっ…カカカモさん、私大体何が起きているか理解してます――とにかくここから出れればいいんですよね？」
涙目になりながらのどかはカモに話しかける
そして小太郎に向けて声を掛けようとして――
「――時間切れだぞネギ・スプリングフィールド」

――氷結の暴力が結界を揺らした

一体何が――今までのものとは比べ物にならない衝撃を浴びながら小太郎がそう思った

いくつもの氷の柱が降り注ぎあたり一面を凍らせていく

すぐに理解した、これは西洋魔法だと

だが一体誰が？これほど大規模な魔法を展開できる魔法使いなんて――

「躾のなっていない犬相手にいつまで手間取っている？この私を待たせるとはいい度胸だな？」

倒れ伏しながらも降りかかってくる氷と同じくらい冷たい声を聴く

「そんな…嘘やろ…！」

長い金髪をたなびかせながら見下すような笑みを浮かべる少女のような存在

いるはずのない存在がそこにいた

「まぁいい、それだけボロボロになりながら諦めなかった気概だけは認めてやろう――ネギ・スプリングフィールド」

闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルがそこにいた

「え、エヴァンジェリンさん…」

「マ、マクダウェルさん～!?」
「エヴァちゃん?!なんでここに?!」
「……今度その名で呼んだら氷漬けにしてやるからな神楽坂明日菜」
若干締まりのないやり取りの後、エヴァは小太郎を一瞥しすぐにネギに向き直る
「予定が変わった、厄介なことになる前にお前たちを詠春――呪術協会の本山に連れていく」
「厄介なこと…っすか?」
びくびくしながらカモはエヴァに聞き返す
「あぁ、話はあとだ――そいつは一応縛っておけよ」
こっそり回復しようとしていた小太郎に氷の塊を飛ばして気絶させながらエヴァはつまらなそうにそう言った

とりあえず近くの木に小太郎を縛り付けた一行は目的地である「関西呪術協会本山」を目指す
「え、えーっと、その…」
突然クラスメートの1人がやってきたと思ったら氷を出したり先頭で誘導し始めたりしたことにのどかは理解が追い付いていなかった
「――大方坊やの後を追って巻き込まれた口だろう?好奇心は猫を殺すものだぞ宮崎のどか?」
「はう…」
のどかにしてみれば先日突然襲い掛かってきた相手であるのでさらに委縮してしまった
エヴァはエヴァでそれを分かった上でのどかに話しかけているので質が悪かった
「それで?宮崎のどかにはきちんと説明したのか坊や?」

「あ、いえ…色々あってまだです…」
「じゃあ今のうちに説明しておけ、本山についてからあれこれ言っては時間が足りん」
そう言うと再び黙ってしまうエヴァに少し困惑しながらもネギはのどかと話を始める
「え、えーっと、宮崎さん…そう言うことですので…」
「あ、えっと、はい…」
ネギと話ができる状況に戸惑いながらも、本の中のような世界に触れられる好奇心から戸惑う様子ののどか
しかしどうやら――
（うぅ…ど、どうしようこの子…）
――彼女の心配事はそれだけではなかったようで
（われわれ…でんぱにはめっぽうよわいので…）
彼女の右ポケットにいる小さな存在の悲痛な思いは届くことはなかった